

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成15年度

2006

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成15年度

2006

奈良市教育委員会



1



2



13



12



8



10

曲柄平鋸

12・13. 柄 8・10. 曲柄又鋸



15 田下鉗



22



16



31 馬形



21

22. 斧鎌柄未製品 16. 木鍤 21. 編台目盛板

は じ め に

平成17年4月、添上郡月ヶ瀬村と山辺郡都祁村との合併によって、人口373,574人の新奈良市が誕生しました。

新しく合併した東部地域にも祖先が育んできた郷土の歴史や文化が多く残されており、月ヶ瀬尾山にある「尾山代遺跡」や都祁村南之庄町の「三陵墓古墳群」はいずれも県の史跡に指定されています。また、奈良市の中央市街地には、奈良時代の都である平城京跡の遺跡が所在するとともに、古都奈良の文化財の歴史そのものが残されています。

奈良市は、長引く景気の低迷にもかかわらず、マンション建設や宅地造成などの民間による大規模開発や市域・道路整備等の開発によって、市街地はますます発展しています。しかしながらその反面、数多くの遺跡が消滅してきており、文化財の保護・保存が大きな問題となっています。やむをえず記録保存を講じた遺跡についても年々件数が増え、調査成果を迅速に公開できないのが現状であります。

このような中で、少しでも早く概要報告書を刊行することをめざし、今年度は平成14年度概要報告書に加え、平成15年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査概要報告書を刊行しました。本書が地域の歴史研究や遺跡の理解を深める上で一助となれば幸いです。

最後になりましたが、関係各位におかれましては、今後ともより一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年3月

奈良市教育委員会
教育長 中尾 勝二

例　　言

1. 本書は、平成15年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要をまとめたものである。
2. 平成15年度～平成17年度の調査体制については下記のとおりである。なお、各調査の現場担当者は発掘調査一覧表に示した。

平成15年度

社会教育部 文化財課 課長	前原武嗣	主幹	森川倫秀
埋蔵文化財調査センター 所長	高谷明男		
庶務係 係長	北尾秀一	事務吏員	山形和宏
調査第一係 係長	西崎卓哉	主任	立石堅志
技術史員	鎌方正樹、秋山成人、安井宣也、松浦五輪美、宮崎正裕、久保清子、原田憲二郎、池田富貴子、山前智敬、大庭淳司		
調査第二係 係長	藤原豈一	主任	三好美穂
技術史員	森下浩行、武田和哉、中島和彦、久保邦江、池田裕英、原田香織		

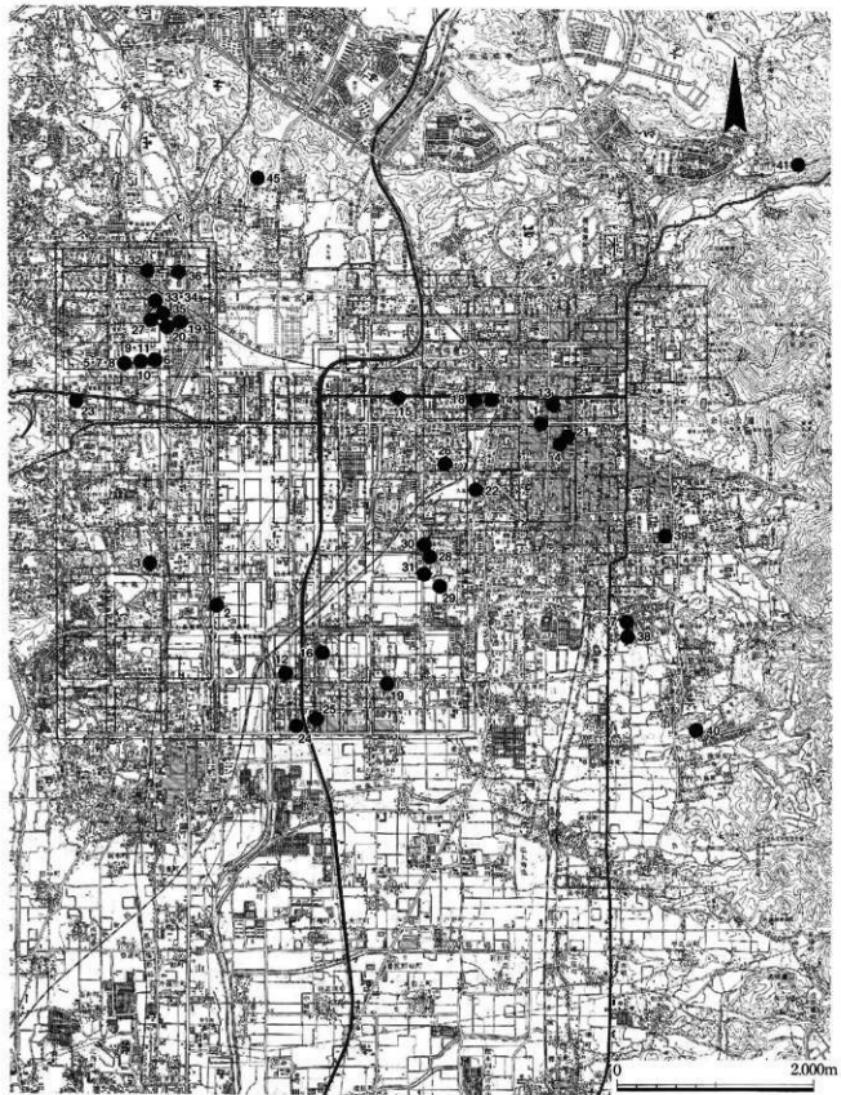
平成16・17年度

社会教育部 文化財課 課長	福井 進	主幹	谷村 勝	課長補佐	森下恵介
埋蔵文化財調査センター 所長	高谷明男	(~16年度)	川本恭久	(17年度)	
庶務係 係長	北尾秀一	事務吏員	山形和宏		
調査第一係 係長	立石堅志				
技術史員	鎌方正樹、秋山成人、安井宣也、松浦五輪美、宮崎正裕、久保清子、山前智敬、大庭淳司				
調査第二係 係長	三好美穂				
技術史員	森下浩行、武田和哉、中島和彦、久保邦江、池田裕英、原田香織				
再任用職員	森川倫秀				

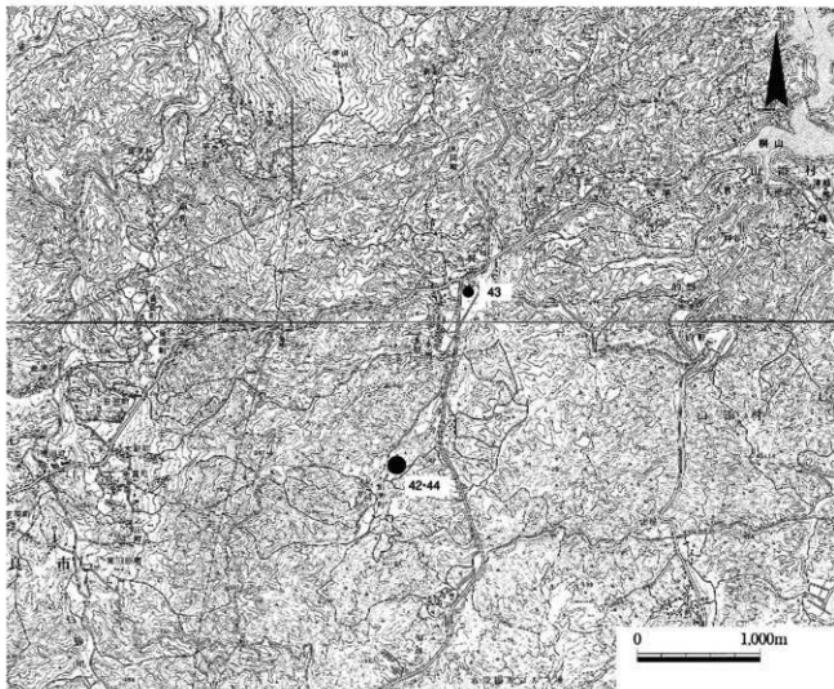
3. 発掘調査と本書の作成については、奈良文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会等関係諸機関からご指導とご教示を賜った。また、土地所有者等からの多大なご協力いただいた。H J 第506次調査出土乾漆箱については、官内庁正倉院事務所からの御教示を賜った。記して感謝いたします。
4. 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した通算次数である。
遺跡の略号は以下のとおりである。
H J - 平城京跡 D A - 大安寺旧境内 G G - 元興寺旧境内 S D - 西大寺旧境内 S R - 西降寺旧境内 N R - 奈良町遺跡 F S - 古市遺跡 H K - 東紀寺遺跡 U A - 歌姫赤井谷横穴墓群 K W - 川上町遺物散布地 M M - 水間遺跡 B S - 別所下ノ前遺跡 B T - 別所辻堂遺跡
5. 本書で使用した遺構等の番号は一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構の番号の前には、S A (塀・柱列)、S B (掘立柱建物)、S D (素掘り溝)、S E (井戸)、S F (道路)、S K (土坑)、S X (その他)の記号を付した。また、遺構の大きさの表記は、すべて遺構検出面での計測値である。
6. 本書で使用した奈良時代の遺物名称・形式・型式は、一部を除いて以下の刊行物に準拠した。
軒瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式』(1) 奈良市教育委員会 1996
鬼瓦：毛利光後彦「日本古代の鬼面文鬼瓦－8世紀を中心として」『研究論集IV』奈良国立文化財研究所 1980
土器：『平城宮発掘調査報告書II』奈良国立文化財研究所 1982
7. 発掘区位置図については、奈良市発行の1/2500人和都市計画図を、調査地位置図については、国土地理院発行の1/25,000地形図を使用した。
8. 本文中、図中に示した位置の表示は、法改正(2002年4月)前の平面直角座標系IVによる。
9. 古墳時代以前の遺跡については、仮に大字名を付して遺跡名としたものもある。
10. 本書の作成は、埋蔵文化財調査センター職員と文化財課記念物係職員が分担して行った。文責は基本的に各調査担当者である。
11. 本書の編集は、三好美穂、立石堅志が担当した。

本 書 目 次

1. 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る調査	1
(1) 平城京右京二条三坊十二坪の調査	第494-1-3-4次	2
(2) 平城京右京二条三坊五坪の調査	第494-5、495-1-2次	5
(3) 平城京右京二条三坊四坪の調査	第494-2次	8
(4) 平城京右京二条三坊一坪の調査	第511次	9
(5) 西大寺旧境内の調査	第16-1-2-3次	10
2. J R 奈良駅南特定土地区画整理事業に係る調査		
平城京左京五条五坊一・二坪、東四坊大路、条間北小路の調査	第506次	14
3. 平城京跡（左京四条六坊八坪）・奈良町遺跡の調査	第490次	21
4. 平城京跡（左京七条一坊十四坪）の調査	第491次	23
5. 六条野々宮古墳・平城京跡（右京六条三坊六坪）の調査	第492次	28
6. 平城京跡（左京四条六坊十坪）・奈良町遺跡の調査	第493次	30
7. 平城京跡（左京九条一坊七坪）の調査	第496次	34
8. 平城京跡（左京三条六坊十一坪）の調査	第497次	35
9. 平城京跡（左京三条五坊六坪）の調査	第498次	37
10. 平城京跡（左京三条三坊十一坪）の調査	第499次	38
11. 舎遺跡・平城京跡（左京八条二坊二坪）の調査	第500次	41
12. 平城京跡（左京九条三坊八坪）の調査	第501次	42
13. 油坂遺跡・平城京跡（東四坊大路）の調査	第502次	43
14. 平城京跡（右京二条二坊九・十六坪）の調査	第503次	46
15. 平城京跡（右京二条二坊十六坪）の調査	第504次	49
16. 平城京跡（左京四条六坊十五坪）・奈良町遺跡の調査	第505次	53
17. 平城京跡（右京三条四坊十四坪）の調査	第507次	55
18. 平城京跡（左京九条一坊十二坪）の調査	第508次	57
19. 平城京跡（左京九条東一坊坊間路）の調査	第509次	61
20. 平城京跡（左京四条四坊五坪）の調査	第510次	62
21. 史跡大安寺旧境内の調査	66
(1) 北面僧房の調査	第101次	67
(2) 西塔跡の調査	第102次	68
(3) 食堂并大衆院推定地の調査	第103次	72
(4) 西面・南面塁地の調査	第104次	73
22. 平城京跡（右京・一条三坊八坪）・西大寺旧境内（食堂院跡推定地）の調査	第15次	75
23. 平城京跡（一条北大路）・西隆寺跡の調査	第7次	83
24. 古市遺跡の調査	第5次	85
25. 古市遺跡の調査	第6次	87
26. 東紀寺遺跡の調査	第6次	89
27. 川上町遺物散布地の調査	第1次	100



平成 15 年度 発掘調査位置図 A 1/50,000



発掘調査位置図 B 1/40,000

(※地図 A・B に記した番号は次頁の検図番号である)

平成15年度防災調査一覧

地図 No.	調査段 番	調査名	調査会場	調査範囲	担当者	事業者	事業内容	監査役監査
1	HJ490	平成15年度第六防災会場・三条大路 / 企良町野瀬	上二ヶ戸15	H15410 ~ 424	360 m ² 中庭	森吉会	住宅の改修	H14-3106
2	HJ491	平成15年度第七防災会場・鹿・猪・猪大路	七条町95-1地	H15424 ~ 79	15600 m ² 武庫・池田 猪大路八丁目	猪大路八丁目	施設整備	H14-2283
3	DH192	平成15年度第八防災会場・井	六条一丁目449-7	H1556 ~ 529	525 m ² 好 人	-	個人的施設	H14-3291
4	BJ493	平成15年度第九防災会場・奈良町道場	柳町30-1 豊城町47	H15520 ~ 630	1760 m ² 京 市	(株) ケイムツテイ	共同防災施設	H14-3222
5		1 平成15年度第二防災会場	豊島町246地	H15526 ~ 88	8000 m ² 西端・山道	豊島町長	盛大な防災会場土地開拓整備会 分合多夢1	H14-3056
6		2 平成15年度第三防災会場	柳町1182-1地	H15528 ~ 627	950 m ² 柳町道	豊島町長	西大寺駅周辺地区山地開拓整備会 分合多夢1	H14-3056
7	RJ494	3 平成15年度第三防災会場	豊島町245地	H15535 ~ 1024	6600 m ² 豊島・山道	豊島町長	盛大な防災会場土地開拓整備会 分合多夢1	H14-3056
8		4 平成15年度第三防災会場	豊島町2411地	H15538 ~ 1924	800 m ² 豊島・山道	豊島町長	西大寺駅周辺地区山地開拓整備会 分合多夢1	H14-3056
9		5 平成15年度第三防災会場	伊留町225-1地	H15515 ~ H16334	3700 m ² 富島・山道	豊島町長	西大寺駅周辺地区山地開拓整備会 分合多夢1	H14-3056
10		1 平成15年度第二防災会場	豊島町225-1地	H1571 ~ 93	2800 m ² 豊島町	豊島町長	西大寺駅周辺地区山地開拓整備会 分合多夢1	H14-3056
11	RJ495	2 平成15年度第三防災会場	作原町216-3地	H15161 ~ 1027	1200 m ² 逸山道	豊島町長	西大寺駅周辺地区山地開拓整備会 分合多夢1	H14-3056
12	RJ496	平成15年度第九防災会場・鶴七年	西九条町2丁目2番地	H1562 ~ 628	2520 m ² 好	元気化事業会社	研究会の設立	H14-3314
13	HJ497	平成15年度第二防災会場・八年	鶴一郎町1-110地	H1563 ~ 619	850 m ² 中島	鶴会会員ビル	西四丁目防災会場整備会	H14-3297
14	HJ498	平成15年度第三防災会場	大字町1-123-2地	H15626 ~ 79	660 m ² 小路	鶴会会員ビル	西四丁目防災会場整備会	H14-3296
15	RJ499	平成15年度第一防災会場・一月	大字町町2丁目281番地	H1573 ~ 92	3553 m ² 三井	清水建設株式会社	新規事業会場	H14-3167
16	HJ500	平成15年度第一防災会場・一月 / 鹤尾路	西九条町6地	H1584 ~ 819	480 m ² 伏山・九条路	豊島町長	第11(1)号令 未定住宅建築事務	H14-3027
17	HJ501	平成15年度第一防災会場・八年 / 八条大路	西九条町2丁目10番地44	H1581 ~ 924	1200 m ² 逸山道	豊島町長	移動式施設ふれいわ記念館設営会	H14-3102
18	HJ502	平成15年度第一防災会場	人見町2丁目15番地	H15810 ~ 129	5850 m ² 八条	人見町長	北川地区防災整備会場整備会	H14-3091
19	HJ503	平成15年度第一防災会場・九年・十六年	西大寺町町1-123-1地	H15916 ~ 1028	4500 m ² 逸山道	中島不動産株式会社	企画シンシン運営	H14-3100
20	HJ504	平成15年度第二防災会場・六年	西大寺町見町1-丁目	H151015 ~ 125	1500 m ² 中島	西大寺町会社	マンシヨン整備	H14-3105
21	HJ505	平成15年度第四防災会場・九年・八年	213-65地	-	1320 m ² 石・原町	豊島町長	豊島小学校敷地整備	H14-3088
22	HJ506	平成15年度第五防災会場・九年	人見町125-1地	H15117 ~ H1623	6380 m ² 逸山道	豊島町長	JR 萩原町駅特定地上区画整備委 立会事業	H14-3145
23	HJ507	平成15年度第六防災会場・四年	東大寺町996-8地	H151125 ~ 1211	1500 m ² 武岡	個人	西向会堂設営会	H14-3142
24	HJ508	平成15年度第九防災会場・一月・八年	西九条町3丁目2番地	H151126 ~ H16116	3050 m ² 野	高橋セキスイ工業	施設整備	H14-3072
25	RJ509	平成15年度第九防災会場・初期	西九条町2丁目1番地	H15131 ~ 1210	1710 m ² 逸山道	西九条セキスイ工業	研修会場の整備	H14-3134
26	RJ510	平成15年度第七防災会場・五年	三条大寺町212地	H1516 ~ H16126	2340 m ² 武岡	(株) フラゲル整備	マジックレンズ	H14-3170
27	RJ511	平成15年度第二防災会場・一月	人見町228-5地	H16126 ~ H16224	1900 m ² 蓼原・北原町 人見町	豊島町長	西大寺駅周辺地区内河床堆積土等 堤防	H14-3056
28	DA101	老健人安松施設内	人見町1-1165番地69	H15513 ~ 320	40 m ² 施設	個人	新の老健人安松のりりやま	H14-1095
29	DA102	老健人安松施設内(西側)	人見町133番地	H1571 ~ 1031	3700 m ² 施設	豊島町長	西大寺今川園内在住高齢者 個人	H14-1096
30	DA103	老健人安松施設内(東側)	人見町144-1 (1055)地	H15117 ~ 1120	350 m ² 施設	個人	老人住宅施設	H14-1031
31	DA104	史跡大寺城跡内	人見町120番地	H16114 ~ H16216	1880 m ² 中島	公文市教育委員会	歴史研究会場	H14-1056
32	SD015	内六寺町樹内	西大寺町258-1地	H15528 ~ 1020	3320 m ² 武岡	(株) ソーラー・ズブ レーン	共同会場整備	H14-3067
33	1	西大寺御塚内	西大寺町2414-1地	H15826 ~ H16122	7100 m ² 安井	豊島町長	西大寺御塚地区土地区画整備委員 会	H14-3056
34	SU016	3 西大寺御塚内	西大寺町2396-6地	H16216 ~ H16220	100 m ² 安井	豊島町長	西大寺御塚地区土地区画整備委員 会	H14-3056
35	36	西大寺御塚内	西人寺町第一丁目7番地	H16220 ~ H16319	2360 m ² 山道	豊島町長	豊島今川園公園整備委員会	H14-3267
37	SE007	西人寺町内	大字町122番地	H1538 ~ 612	3027 m ² 久代地	豊島町長	古市人寺文化センター整備委員会	H14-3016
38	TS008	山寺尾根	大字町1226-1地	H15610 ~ 74	2280 m ² 伏山	豊島町長	第109-1(古市) 伏山地区整備委員会	H14-3026
39	TS009	伏山地帯	東寺町2-1丁目707番地	H15121 ~ H1326	6030 m ² 山道	豊島町長	伏山寺町 伏山寺地区整備委員会	H14-3183
40	TS004	山寺地帯	山寺町94-3地	H1624 ~ H1623	4250 m ² 大寺	豊島町長	山寺寺地区整備委員会	H14-3266
41	KW001	川之町防災整備地	西野町287-2地	H1523 ~ H16217	1880 m ² 山道	豊島町長	施設整備工事会員裏川上屋	H14-3234
42	DT001	御寺北之庄防災整備	御寺町239-9地	H1556 ~ 64	7260 m ² 岩・人屋	豊島町長	駒者2号地防災整備委員会	H14-3153
43	MW002	毛馬選舉	光明町164番地	H15824 ~ 428	7100 m ² 岩・土壇	豊島町教育委員会	教育会場整備委員会	H14-3153
44	BS002	浜町下 / 茂庭路・須坂防災整備	浜町下409地	H15936 ~ H16189	23400 m ² 大坪	豊島町長	豊島浜町防災整備委員会	H14-3153
45	BT002	牧志參合公園内	牧志參合59062	H16120 ~ H16219	7500 m ² 逸山道	豊島町教育委員会	道路整備委員会	

(※別途近畿道路、水系道路、羽南下 / 須坂路、歌謡会計構造穴、別に札記)

1. 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る調査

この調査は、奈良市が進める西大寺駅南地区土地区画整理事業（総面積約30万m²）に係り実施した埋蔵文化財発掘調査である。奈良市教育委員会では、昭和63年から事業地内の発掘調査を継続して実施している。

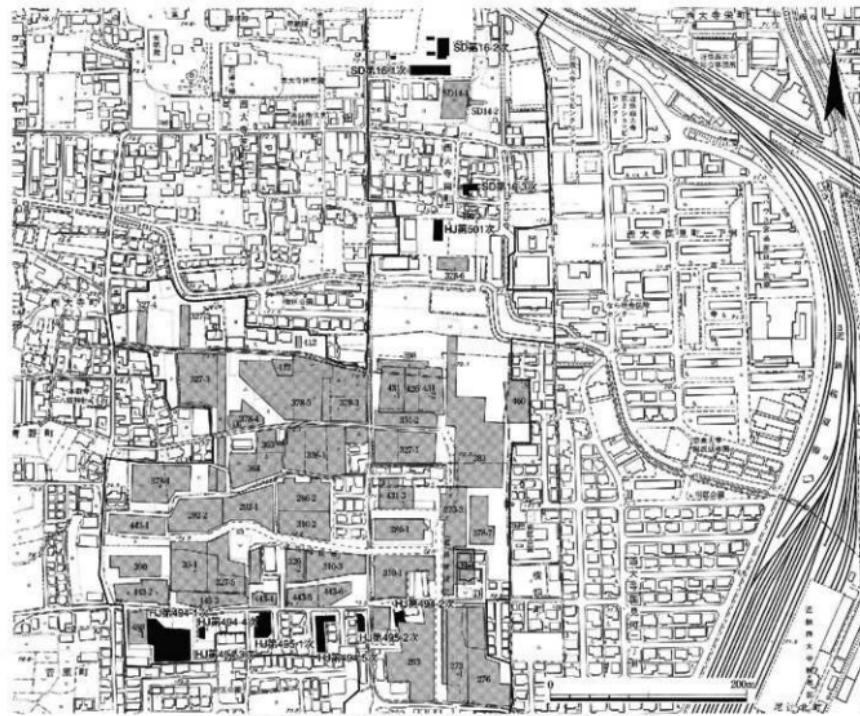
下表の通り、平成15年度は臨時交付金事業で5箇所、促進事業で2箇所、通常事業で4箇所の発掘調査を実施した。調査面積は3,530m²であり、初年度からの総発掘

面積は104,659m²になる。

平成15年度の調査地は、平城京右京二条三坊一・四・五・十二坪の4坪分と西大寺旧境内に及んでいる。ここでは、それらの調査を各坪と西大寺旧境内に分けて報告する。遺構番号は、坪ごとの通し番号とし、古墳時代以前の遺構に2桁の番号を、奈良時代以降のものに3桁の番号を付している。

平成15年度 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業地内発掘調査一覧表

調査名	調査次数	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
平城京右京二条三坊十二坪	HJ49-1	臨時交付金事業	菅原町246他	平成15.5.26～8.8	800m ²	宮崎・山前
平城京右京二条三坊四坪	HJ49-2	臨時交付金事業	菅原町182他	平成15.5.26～6.27	90m ²	池田富
平城京右京二条三坊十二坪	HJ49-3	臨時交付金事業	菅原町245他	平成15.8.18～10.24	660m ²	宮崎・山前
平城京右京二条三坊十二坪	HJ49-4	臨時交付金事業	菅原町2441他	平成15.8.18～10.24	80m ²	宮崎・山前
平城京右京二条三坊五坪	HJ49-5	臨時交付金事業	菅原町2281他	平成15.11.5～平成16.1.14	370m ²	宮崎・山前
平城京右京二条三坊五坪	HJ49-5-1	促進事業	菅原町2291他	平成15.7.1～9.3	380m ²	池田富
平城京右京二条三坊五坪	HJ49-5-2	促進事業	菅原町2143他	平成15.10.1～10.27	120m ²	池田富
平城京右京二条三坊一坪	HJ511	通常事業	西大寺南町23881他	平成16.1.26～2.24	190m ²	宮崎・池田富
西大寺旧境内	SD1-1	通常事業	西大寺南町24141他	平成15.9.26～11.22	470m ²	安井
西大寺旧境内	SD1-2	通常事業	西大寺南町2414-1他	平成15.12.5～平成16.1.22	270m ²	安井
西大寺旧境内	SD1-3	通常事業	西大寺南町2390-6他	平成16.2.6～2.20	100m ²	安井



(1) 平城京右京二条三坊十二坪の調査 第494-1-3-4次

I はじめに

調査地は平城京右京二条三坊の十二坪の北辺中央にある。平成14年度に西隣接地で、十二坪内北1/4の位置に造られた東西方向の坪内道路を検出している(市HJ第480-1次調査)。今回、十二坪内の様相解明を主目的に、西から順にHJ第494-1・3・4次発掘区を設定した。

II 検出遺構

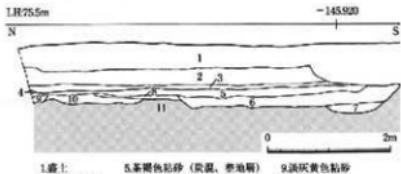
調査地の現況は水田及び畑である。基本層序はHJ第494-1次発掘区では、耕作土・床土の直下の地表面から0.3mで淡黄色粘質土の地山に至る。HJ第494-3次発掘区では、耕土・床土の下に遺物包含層が堆積し、地表面から0.8mで黄灰色粘砂の地山に至る。HJ第494-1・3次発掘区の北半の地山直上に整地土が堆積していた。HJ第494-4次発掘区でも耕土・床土の下に遺物包含層が堆積し、地表面から0.5mで淡黄灰色砂質土の地山に至る。地山上面の標高は発掘区の南西で74.7m、発掘区の北東で74.2mである。HJ第494-1・3次発掘区北半の遺構を整地上上面で、他の遺構を地山上面で検出した。

検出した主な遺構には、绳文時代の土器埋納土坑1、古墳時代の4条、奈良時代前半の掘立柱建物2棟、中頃～後半の掘立柱建物4棟、後半の掘立柱建物2棟、後半～末葉の掘立柱建物2棟、坪内道路1条、土坑1、平安時代の掘立柱建物5棟・塀1条がある。その他、時期の特定できなかった掘立柱建物12棟、土坑4がある。

掘立柱建物・塀の概要是一覧表に記し、以下、時代ごとに遺構の概要を述べる。

绳文時代 晩期後半の土器埋納土坑SX03がある。掘形は東西0.7m、南北0.5mの平面橢円形で、深さ0.1mである。掘形内には、口縁端部の外側に刻目突帯を付す船橋式の深鉢が口縁部を西に横向きに据えられていた。

古墳時代 溝4条(SD04～07)は、後期の素掘りの溝で、すべて北東に掘れる。幅・深さはともに0.3m程度で、発掘区外に続く。



第494-1次調査 発掘区東壁(北端) 土層図 1/80

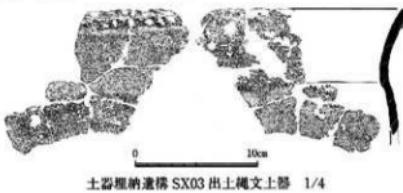
III 泰良時代

前半 発掘区南西隅にSB216・217が建つ。両者とも発掘区外に続く。重複関係からSB216はSB228・221、SB217はSB221よりも古い。

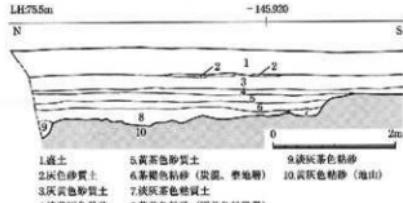
中頃～後半 SB218～221がこの時期に相当する。SB218の西妻柱と東妻柱を揃えるSB219、SB218の東妻柱と西妻柱を揃えるSB220がSB218の南に建ち、SB219・220が東西に並立する。また、SB221がSB220の南で、SB220の西妻柱と西側柱を揃えて建つ。重複関係からSB218はSB212とSA215、SB220はSB222よりも古く、SB221はSB216・217よりも新しい。

後半 SB208・222・223とSA215がこの時期に相当する。SB208は東西両面庇南北棟建物である。SA215は3間分を検出し、塀の東端を確認した。SB222はSA215と北妻柱を揃え、南妻柱をSB223の南側柱と揃える。SB223は妻柱を持たない。重複関係からSB208はSB213よりも古く、SA215はSB218、SB222はSB220よりも新しい。

後半～末葉 東西方向の坪内道路SF901が敷設される時期である。SF901の道路心の国土座標値はX=-145,922.100、Y=-20,000,000。SD101・102は素掘りの溝で、SF901の両側溝である。北側溝SD101は、幅0.9m、深さ0.4mで、長さ42m分を検出した。溝心の国土座標値はX=-145,920.600、Y=-20,000,000。南側溝SD102は、幅0.5～1.2m、深さ0.3mで、発掘区西端から28.5mで途切れる。溝心の国土座標値は、



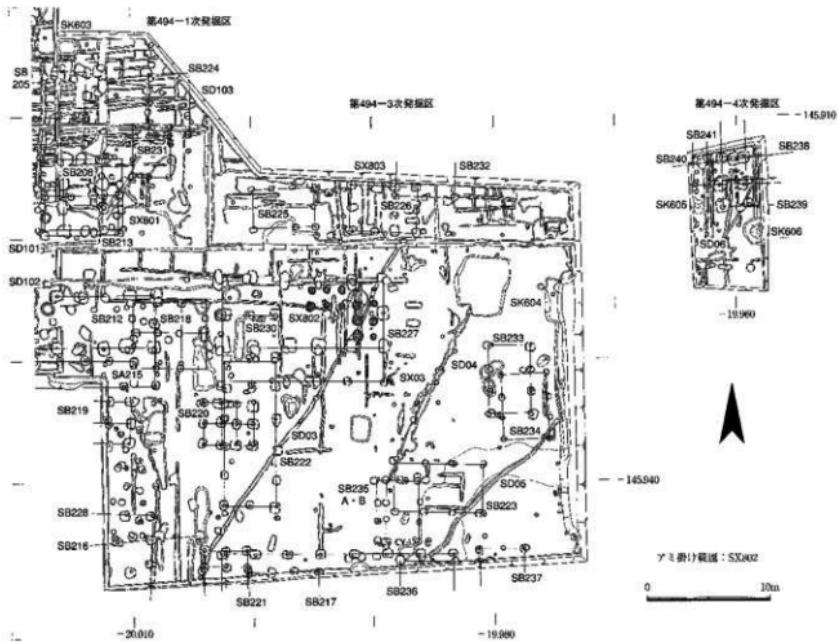
土器埋納遺構 SX03 出土の土器 1/4



第494-3次調査 発掘区東壁(北端) 土層図 1/80

据立柱建物・場一覧

番号	棟方向	面積 (桁行×梁間)	桁行全長 m	梁間全長 m	桁行柱間寸法 m	梁間柱間寸法 m	棟の出 m	備考
SA215	東西	13 以上	26.0 以上	20 m 等間				西に延びる
SR205	東西	4 × 3	7.5	5.7	2.5 m 等間	北から 2.1-1.8-2.1	南 2.1	西に延びる
SR208	南北	4 × 4	6.0	6.0	北から 2.1-2.1-1.8	1.5 m 等間	西・東 1.5	西に延びる
SB213	東西	3 × 2	6.0	3.0	西から 2.1-1.8-2.1			西に延びる
SR212	東西	5 × 3	10.0	7.2	2.0 m 等間	北から 2.1-2.1-3.0	南 3.0	西に延びる
SR219	東西	2 以上 × 2	1.8 以上	3.6	1.8 m	1.8 m 等間		柱柱建物
SR228	南北	4 以上 × 2 以上	6.0 以上	2.1 以上	北から 2.1-1.8-2.1	2.1 m		桁行 4 間以上か?
SR216	東西	3 以上 × 2 以上	6.5 以上	2.7 以上	3.3 m 等間	2.7 m		西で南に張れる
SR224	南北	3 × 2	5.1	3.2	1.5 ~ 2.1 m	1.6 m 等間		桁行柱間が不揃い
SB231	南北	3 × 2	4.2	3.0	1.2 ~ 1.5 m	1.5 m 等間		桁行柱間が不揃い
SR225	東西	3 × 2	5.1	3.2	1.7 m 等間	1.6 m 等間		
SB218	東西	3 × 2	5.4	5.4	1.8 m 等間	2.7 m 等間		柱柱建物
SB230	東西	2	4.2		2.1 m 等間			門?
SB227	東西	5 × 3	13.0	8.1	2.6 m 等間	2.7 m 等間	南 2.7	
SB222	南北	5 × 2	12.0	4.0	2.4 m 等間	2.0 m 等間		
SB220	東西	3 × 2	3.9	3.4	1.3 m 等間	1.7 m 等間		柱柱建物
SB221	南北	2 以上 × 2	1.3 以上	3.4	1.3 m	1.7 m 等間		柱柱建物
SB229	東西	7 × ?	18.9		2.7 m 等間			
SB217	?	東西 3 間	5.7		西から 1.8-1.8-2.1			北側柱か北妻柱
SB226	東西	3 × 2	5.4	3.6	西から 2.1-1.8-1.8	1.8 m 等間		
SB222	南北	? × 2		4.8		2.4 m 等間		南妻柱
SB233	南北	3 × 1	5.4	3.4	1.8 m 等間	3.4 m		南北妻柱無
SB234	南北	3 × 2	5.4	3.6	1.8 m 等間	3.6 m		南北妻柱無
SB223	東西	3 × 1	7.2	4.0	2.4 m 等間	4.0 m 等間		妻柱無
SB235A	南北	3 × 2	5.1	2.7	北から 1.8-1.5-1.8	西から 1.5-1.2		
SB235B	南北	3 × 2	5.1	3.6	北から 1.8-1.5-1.8	1.8 m 等間		SB235A の建替
SB236	?	東西 3 間	6.6		西から 2.1-2.4-2.1			
SB237	南北	? × 2		3.6		1.8 m 等間		北妻柱
SB238	?	東西 2 以上	2.7 以上		2.7 m			内で南に張れる
SB239	南北	3 以上 × 2 以上	4.2 以上	2.0 以上	2.1 m 等間	2.0 m	西 2.0	
SB240	東西	3 以上 × 2 以上	4.2 以上	2.4 以上	2.1 m 等間	2.4 m		
SB241	?	2 以上 × 2 以上	2.1 以上	2.1 以上	2.1 m	2.1 m		



第 494 - 1・3・4 次調査 造構平面図 1/400

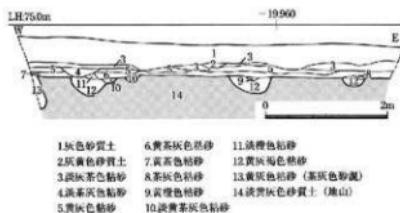
$X = -145,923.600$, $Y = -20,000.000$ 。両者の溝心々距離は 3.0 m である。SD 103 は SD 101 から北へ流れる南北方向の素掘りの溝で、幅 1.8 m、深さ 0.4 m で、長さ 11 m 分を検出した。SB 224 は SB 205 の北側柱と北妻柱を捕える。SX 801 は南北 3.0 m、東西 9.5 m、深さ 0.3 m の土坑である。重複関係から SD 101 は SX 801 よりも新しく、SD 102 は SB 212・227 よりも古い。

平安時代前半 SD 101・102・103 埋没後の時期に相当する。SB 213 の東側には、SB 225・226 が両側柱筋を捕えて建つ。さらに南側には、SB 212 と南側柱筋を捕えて SB 227 が建つ。SB 227 は南庇付東西棟建物であり、身舎内の東半部分で、埋廻跡である SX 803 を検出した。堀はすべて抜き取られていたが、深さ 0.2 m 前後の鉢状の痕跡を 14 個確認した。SA 230 は SB 227 廃絶後に築かれる。他に、SB 228 が SB 212 の東妻柱と、SB 229 が SB 227 の西妻柱と柱筋を捕えて建つ。重複関係から SB 225 は SD 101 よりも新しく、SB 226 は SX 803 よりも古い。SB 212 は SD 102・SB 218、SB 227 は SD 102 よりも新しく、SB 230 よりも古い。SB 228 は SB 216、SB 229 は SB 221 よりも新しい。

時期不明の遺構 以下、時期の特定できなかった遺構について述べる。SB 233・234 は妻柱を持たない南北棟建物である。両者は建物位置が重なるが、先後関係は不明である。SB 235A・B は東側柱を共有し、桁行・梁間と間数を変えずに A を B に建て替える。建物位置は SB 223 と重なるが、先後関係は不明である。SB 238 は南側柱あるいは南妻柱を一部検出した。重複関係から SB 239・240 よりも古い。SB 239・240・241 は建物の南西隅を検出した。重複関係から SB 239 は SB 240 よりも古い。

SK 603 は南北 1.5 m、東西 1.8 m、深さ 1.4 m の土坑で、断面形は袋状である。SK 604 は南北 22 m の溝状の土坑で、東西 1.5 m、深さ 0.7 m まで確認した。発掘区外東に続く。SK 605 は南北 1.3 m、東西 0.9 m 以上、深さ 0.4 m の平面不整形な土坑である。西端は発掘区外に続く。SK 606 は南北 2.5 m、東西 1.7 m 以上、深さ 1.6 m の土坑である。発掘区外東に続く。枠材はなかったが、平面・断面の形状から、井戸の抜き取り痕跡の可能性がある。SX 804 は SB 226 廃絶後、当建物の北西隅の柱痕跡上に掘られた土器埋納土坑で、南北 0.45 m、東西 0.6 m、深さ 0.25 m である。土坑底には、須恵器壺 A が正位置で置かれ、壺内には流入土以外に内容物は無かった。

遺物は、整理箱で 87 箱分が出出土した。大部分が遺物包含層から出土した奈良時代の土師器・須恵器の小片である。他に、奈良時代の丸瓦・平瓦や古墳時代の土師器・須恵器・埴輪の小片が少量ある。(宮崎正裕、山前智敬)



第 494 - 4 次調査 発掘区北壁土層図 1/80



第 494 - 1 次調査 発掘区全景 (北西から)



第 494 - 3 次調査 発掘区全景 (北から)



第 494 - 4 次調査 発掘区全景 (東から)

(2) 平城京右京二条三坊五坪の調査

第494-5次調査 調査地の北側で、平成12年度に実施した市HJ第443-5・6次調査で、五・六坪坪境小路とその北側溝を検出している。今回、五坪の宅地内北端の様相確認を主目的として実施した。

基本層序は、耕土・床土以下、灰色砂質土、灰茶色粘砂と続き、地表下0.6mで黄灰色粘質土の地山に至る。地山上面の標高は概ね72.7mで、遺構はすべて地山上面で検出したが、発掘区北東部の一部に整地土を確認した。

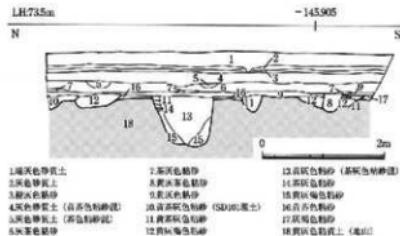
検出遺構には、溝2条、掘立柱建物5棟・塀1条、土坑2がある。SD101は東西方向の素掘溝で、溝の南端を検出したのみであるが、SD102は幅・深さともに0.3m、長さ約13mの南北方向の素掘溝で、国土方眼方位北で東に振れる。重複関係からSB203よりも古い。SB201は南北1間(3.0m)以上の建物の北西隅である。SB202は桁行2間(3.6m)以上、梁間2間(3.9m)の東西棟建物である。SB203は桁行5間(13.0m)、梁間1間(3.3m)以上の西庇付南北棟建物で、柱掘形から奈良時代後半の土器が出土した。重複関係からSD102よりも新しく、SK601よりも古い。SB204は南北2間(4.8m)以上、SB205は東西2間(4.8m)以

第494-5・495-1-2次

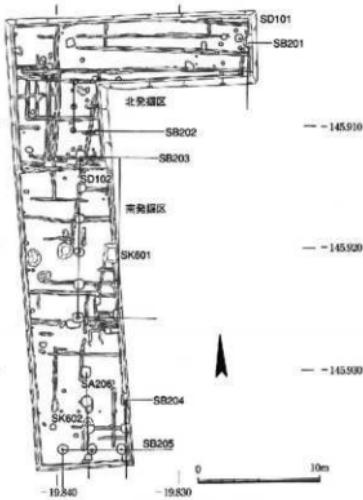
上の建物の北西隅で、重複関係からSB204はSB205よりも古い。SA206は南北3間(4.2m)以上の塀で、柱掘形から奈良時代後半の土器が出土した。重複関係からSK602よりも古い。SK601は南北1.5m、東西1.2m以上、深さ0.4mの土坑で、重複関係からSB203よりも新しい。SK602は南北1.2m、東西1.0m、深さ0.5mの土坑で、重複関係からSA206よりも新しい。

遺物は、整理箱で10箱分が出土した。大半が遺物包含層から出土した奈良時代の土師器・須恵器である。

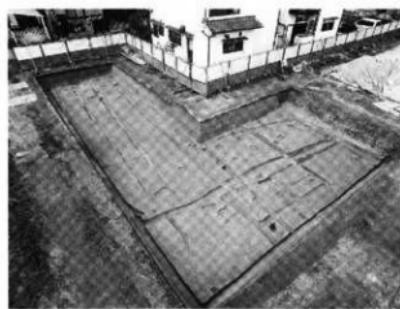
(宮崎正裕、山前智敬)



第494-5次調査 発掘区東壁土層図 1/80



第494-5次調査 遺構平面図 1/400



第494-5次調査 北発掘区全景 (北西から)



第494-5次調査 南発掘区全景 (北から)

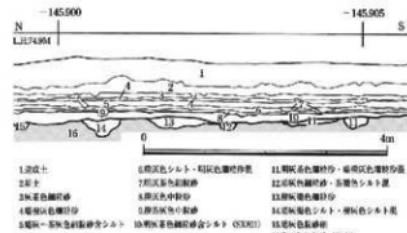
第495-1次調査 調査地は五坪の北西隅に位置する。調査地の北で、平成12年度に実施した市HJ443-4次調査で、五・六坪境小路とその北側溝を検出している。今回、五坪北端の様相確認を主目的として実施した。

基本層序は、造成土、耕土以下、灰茶色細粒砂、暗灰色細粒砂、灰茶色シルト質細粒砂、橙灰色中粒砂～シリト質細粒砂と続き、地表面から0.8～1.0mで、黄灰色～灰色細粒砂の地山に至る。また、発掘区北半には南東から北西に流れる自然流路がある。北岸を検出したが、南岸は発掘区外である。地山上面の標高は73.2～73.3mで、遺構はすべて地山上面で検出した。

検出遺構には、弥生時代の土坑1（SK01）、奈良時代の掘立柱建物4棟（SB212～215）、掘立柱塀5条（SA207～211）、溝1条（SD103）、井戸1基（SE501）の他、耕作に関連すると考えられる素掘溝がある。以下、主な遺構について述べる。SK01は直径0.6m、深さ0.3mの土坑である。弥生土器の壺底部の破片が少量とサヌカイトの潤片1点が出土した。SA210は東西方向の塀で、5間（10.0m）分を検出した。発掘区外東に続く。SB214は桁行4間（10.0m）、梁間2間（4.5m）の南北棟建物である。SB215は梁間2間（3.6m）の東西棟建物で、桁行1間（1.8m）分を検出した。S

B214・215は、両建物の柱抜き取り痕跡から8世紀後半～末の遺物が出土した。SD103は幅1.0m、深さ0.2mの東西方向の素掘溝で、長さ7m分を検出した。発掘区外東に続く。8世紀の土師器、須恵器が出土した。重複関係からSA208・SB215よりも古い。SE501は井戸の柱抜き取り痕跡で、南北2.8m、東西2.1m、深さ2.8mである。8世紀後半～末の土師器、須恵器、9世紀後半～10世紀前半の土師器、黒色土器A類、平瓦が出土した。SK603は南北3.0m、東西3.5mの上坑で、深さ0.45mである。SX801は東西方向の溝状の落ちで、発掘区北端の最深部は深さ0.3mである。8～9世紀後半の土師器、須恵器が出土した。重複関係からSX801は耕作に関連すると考えられる素掘溝よりも新しい。

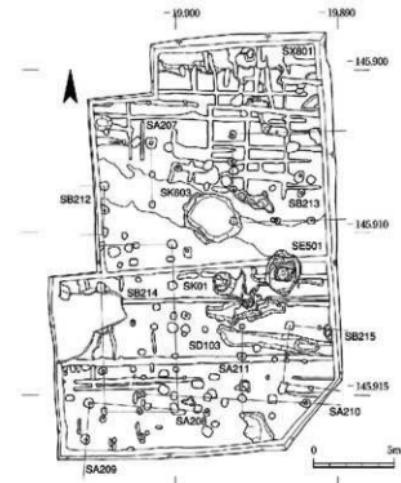
（池田富貴子）



第495-1次調査 東壁土塀 (1/80)



第495-1次調査 北発掘区全景 (南西から)



第495-1次調査 遺構平面図 1/300



第495-1次調査 南発掘区全景 (北西から)

第495-2次の調査 調査地は、五坪の北東隅に位置する。調査地の北には五・六坪坪境小路、東には四・五坪坪境小路が想定されている。今回、これら周辺の条坊に関連する遺構の確認を主目的として実施した。

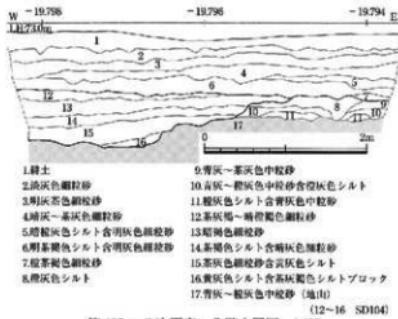
基本層序は、造成土、耕土以下、明灰茶色細粒砂、淡茶灰色細粒砂、暗灰～茶灰色細粒砂、明灰色細粒砂、明橙茶灰色シルト、暗橙灰色シルト、明茶褐色シルトと続き、地表面から1.1mで黄灰色～橙灰色シルト～細粒砂の地山に至る。地山上面の標高は発掘区の北端で71.8m、南端で72.1mである。遺構はすべて地山上面で検出したが、発掘区北端から南へ3m程度の範囲に概ね0.3mの厚さの整地土が広がることを確認した。

奈良時代の遺構には、五坪の東を画する築地塀（S A 216）とその雨落溝（S D 104）、素掘溝（S D 105・106）、柱穴がある。S A 216は南北1間（3.0m）分を検出。築地の西添柱の可能性がある。雨落溝S D 104は溝幅3.0m以上、深さ0.3mの南北方向の素掘溝で、東肩を検出したが、西肩は発掘区外である。溝底の標高は南端で71.56m、北端で71.46mである。溝内埋土は、上層が暗褐色細粒砂、下層が茶灰色～黄灰色シルトに大

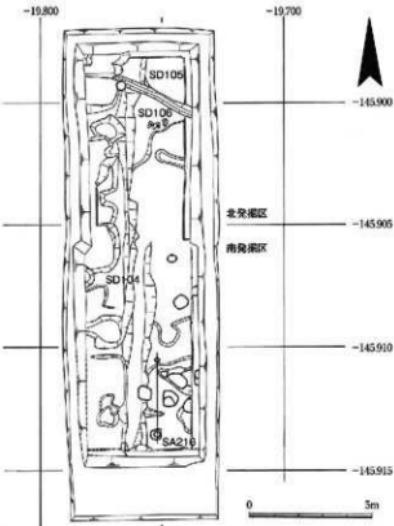
別される。S D 105は南東から北西へ斜行する幅0.3m、深さ0.2mの溝で、遺構内には暗褐色細粒砂が堆積していた。出土遺物はなく、S D 104と同時期に埋没する。S D 106は上層埋土がS D 104と似ており、S D 104のあふれの可能性がある。

遺物の大半が築地雨落溝S D 107から出土している。S D 107の出土遺物には、土師器、須恵器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、磚、刀子がある。S D 107の下層埋土には8世紀後半の、同上層埋土には8世紀末～9世紀初頭の遺物が含まれる。S D 110からは、軒丸瓦6313型式D種、軒平瓦6685型式A種、同6710型式C種が出土している。

（池田富貴子）



第495-2次調査 北壁土層図 1/60



第495-2次調査 遺構平面図 1/200



第495-2次調査 北発掘区全景（南から）



第495-2次調査 南発掘区全景（北から）

(3) 平城京右京二条三坊四坪の調査

調査地は、平城京右京二条三坊四坪の北西部に位置する。調査地の北に三・四坪坪境小路が想定される。発掘区の南で、平成6年度に市HJ第293次調査、発掘区の西で平成9年度に市HJ第378-2次調査を実施しており、三・四坪坪境小路南側溝、四坪の北辺築地とその雨落溝などを検出している。今回、条坊に隣接する遺構の確認を主目的として実施した。

基本層序は、造成土、耕土以下、明灰色細粒砂、橙灰色細粒砂、明灰色細～中粒砂、暗褐色細粒砂、橙灰色シルト含青灰色細粒砂、橙茶灰色シルト含マンガン、暗灰青色中粒砂と続き、地表面から1.2mで黄灰色シルトの地山に至る。地山上面の標高は71.65～71.7mである。遺構はすべて地山上面で検出した。

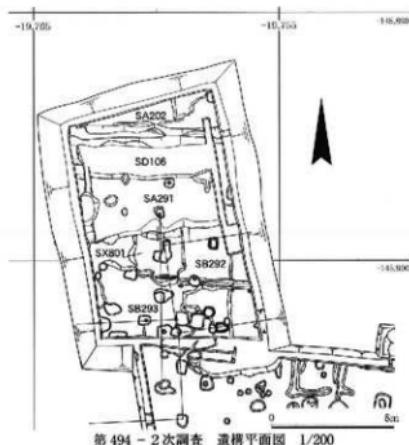
奈良時代の遺構には、四坪の北辺築地（SA202）とその雨落溝（SD106）、掘立柱建物2棟（SB292・293）、掘立柱塀1条（SA291）と、浅いくぼみ状の遺構SX801がある。SD106は幅4.0～5.0m、深さ0.1～0.3mである。南へ広がる浅い部分は上層、北側の深い部分は下層である。後述するSA291との重複関係からあふれなどが原因で、当初の掘形より幅広くなっていると考える。SA202は添柱痕跡を検出していないが、市HJ第378-2次の調査成果から北辺築地と考える。SA291はHJ第293次調査で検出した柱穴と合わせて、南北4間（4.8m）の塀となる。北端の柱穴はSD106の上層を掘削後に検出しており、SD106が南へ広がる前の遺構と考える。重複関係から、SB292はSA291よりも新しい梁間2間（3.6m）の東西棟建物で、桁行1間（1.9m）分を検出した。SA291と重複する北西隅の柱穴は、2回作り直された後、柱が抜き取られている。SB293は、桁行2間（3.3m）以上、梁間2間（4.2m）の東西棟建物である。東側柱列はHJ第293次調査区まで続く。北側柱列はHJ第378-2次調査区までは

第494-2次

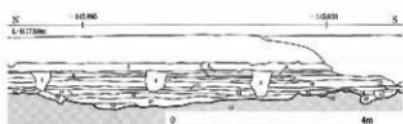
統かず、両発掘区間に収まる。SB292とは建物位置は重複するが、新旧関係は不明である。SX801は、くぼみ状の遺構で、重複関係からSD106、SA291よりも古い。遺構内には、灰茶色シルトが0.05～0.1mの厚さで、2m四方の範囲に堆積している。

出土遺物には、土師器、須恵器、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、磚、石器、石製品がある。SD106からは、8世紀後半～末を中心とした遺物が出土し、上層と下層の出土土器には、明確な時期差は確認できなかった。また、上層の出土土器には、9世紀的に見えるものもあったが、溝内の大部分は8世紀末頃にはほぼ埋没していたものと考えられる。SX801、掘立柱建物・塀の柱穴の出土土器には、詳細な時期が分かるものは少ないが、建物としてまとまらなかった柱穴の1つから、8世紀後半の土器が出土している。掘立柱建物・塀の重複関係からみて、3時期以上の変遷が確認できる。

（池田富貴子）



第494-2次調査 遺構平面図 1/200



第494-2次調査 発掘区東壁上層図 1/100



第494-2次調査 発掘区全景（南から）

(4) 平城京右京二条三坊一坪の調査

調査地は、平城京右京二条三坊一坪の北辺部中央に当たり、すぐ北には一条南大路が通る。現況は駐車場で、それ以前は水田であった。過去に一坪内で実施した調査は3件（市HJ第51次・第378～6次調査、国183～18次調査）ある。一坪内は、坪の中央を西から東に流れる旧流路があり、奈良時代をはじめ室町時代の掘立柱建物や井戸を検出しているが、全体的に建物をはじめ遺構密度が希薄である。また、調査地の北東にあたる一条南大路と西二坊大路の交差点付近で実施した市HJ第480～2次調査で、南北方向の近世流路を検出している。今回、一条南大路と一坪北半部に関する奈良時代以降の土地利用の様相を把握することを主目的に調査を実施した。

基本層序は、駐車場の造成盛土（厚さ0.6m）の下に水田耕作土・底土（厚さ0.3m）がある。遺物包含層は確認できず、地表下0.9mで黄灰緑色シルト（含細粒砂）の地山に至る。地山の標高は概ね70.1mである。

遺構はすべて地山上面で検出した。耕作に関連すると

第511次

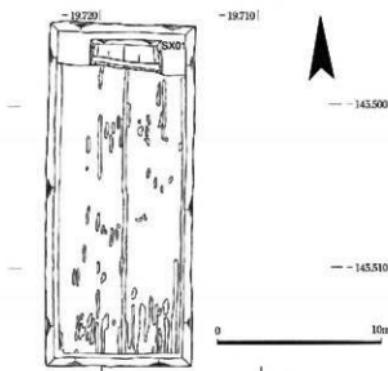
考えられる南北方向の素掘り溝や杭の痕跡を多数確認した以外は、発掘区北端で東西方向の溝状の落ち（S X 01）を検出したのみである。S X 01は東西長7.5m以上で、発掘区外に続く。国上方眼方位東で南にやや振れる。幅は2.5m以上になるが、北端は発掘区外北に続く。坑内を深さ1mまで掘削したが、最深部には到達していない。埋土から近世陶器が出土した。土層観察の結果、流水の痕跡は確認できることと、堆積状況から、少なくとも上層の0.2m程度は水田耕作土（西壁土層図の「4」層）で、その下層は水田化した際の盛土（同図の「5・6」層）である可能性が高い。

当調査地の西約20mで実施した市HJ第51次発掘区でS X 01を検出していない。S X 01は当調査地と市HJ第51次調査地の間で途切れるか、国上方眼方位西でさらに北に振れるものと考えられる。今回、一条南大路に関わる遺構は検出できなかったが、S X 01は検出位置と規模を考えると、一条南大路の南側溝を踏襲したか、あるいは元来「切り通し」であった一条南大路を踏襲した可能性が高い。

（宮崎正裕）



第511次調査 発掘区西壁（北端）土層図 1/100



第511次調査 遺構平面図 1/300



第511次調査 発掘区全景（南から）



第511次調査 S X 01（西から）

(5) 西大寺旧境内の調査 第16-1 - 2 - 3次



第16-1 - 3次調査 発掘区位置図 1/6000

調査地は、平城京の条坊復原では右京一条三坊三・四坪で、西大寺造営後は伽藍の東に隣接する寺地になったと推定されている。SD第16-1・2次調査地は三坪の南半部中央にある。現状は駐車場で、その前は水田であった。SD第16-3次調査地は四坪の南東隅にある。現状は宅地であるが、その前は四坪の南を画する一条南大路の遺存地割の水田で、東を画する西二坊大路の遺存地割の水田とともに周辺より1~2m低くなっていた。

I. SD第16-1・2次調査の概要

SD第16-1・2次調査地が位置する三坪内では、昭和53年度に奈良国立文化財研究所が第112-1次調査(490m²)を実施し、奈良時代の掘立柱建物・塀・溝と中世の上坑を確認したが、奈良時代の遺構は西大寺に関連するのか、それ以前の宅地に伴うのかは不明である。

今回の調査は、発掘区を前述の国第112-1次調査と一部重複して設定し、西大寺造営前の三坪内や造営後の寺地内の様相を確認することを主な目的として実施した。

A. 層序 基本的には造成土(厚さ0.2~0.3m)、黒灰色砂質シルトの耕作土層(厚さ0.2m)の下で明黄灰色砂質シルト層の地山となる。地山上面が奈良時代の遺構面で、標高はSD第16-1・2次発掘区とも概ね71.7mである。

B. 検出遺構 奈良・平安時代と室町時代の遺構がある。以下、主なものを記す。なお、遺構番号は奈良国立文化財研究所と区別して付した。

奈良・平安時代 掘立柱建物2棟(S B201・202)、掘立柱列4条(S A203~206)、井戸1基(S E501)、土坑2基(S K601・602)、性格不明遺構1基(S X801)がある。

S B201は重複関係から後述のS E501より古いことがわかる。掘立柱列のうちS A203・204は塀で、発掘区の縁辺で確認したS A205、S A206は建物の一部の可能性がある。S A203はS B202の西側柱列と柱筋を揃える。

S E501は一辺2.1mの平面隅丸方形で深さ0.9mの掘形内に一辺0.9mの方形板組横棟止め構造の井戸枠を据える。枠材は一部が残る。枠内底部に据えた径0.3m、深さ0.2mの曲物を水溜とし、その周縁に環を敷く。曲物内から須恵器の円面鏡が出土した。

S K601の埋土からは奈良時代の土器片とともに炭や銅滓が出土した。付近で銅製品の鋳造が行われたことがうかがえる。S X801は、一辺1.2mの平面隅丸方形で深さ0.5mの掘形の底部中央西寄りに東西0.4m、南北0.6mの平面方形の環敷きがあり、その周縁に土師器や須恵器の壺片や平瓦片が立ち並んでいた。環敷き上には木片が残存した。掘形が明黄灰色砂質シルト層の地山でおさまるため、井戸ではなく何らかの目的で環敷き上に木製の枠か箱を据えた可能性を考える。

室町時代 井戸3基(S E502~504)、土坑3基(S K603~605)がある。

S E502は、径1.5mの平面円形の掘形をもつ瓦積井戸で、深さは21m。底部に径0.6m、深さ0.6mの桶を据えて水溜とする。瓦積に利用した瓦は大半が平瓦で、他に軒瓦や瓦質土器片も含む。水溜内から15世紀の土師器皿、瓦器碗が出土した。S E503、S E504はともに径1.2mの平面円形の素掘りの井戸で、深さは12m。前者からは14~15世紀とみられる土師器皿片が、後者からは14~15世紀とみられる瓦質土器揃鉢片が出土した。

S K603~605の埋土からは、14~15世紀の土師器・瓦質土器・青磁や瓦塊類が出土した。

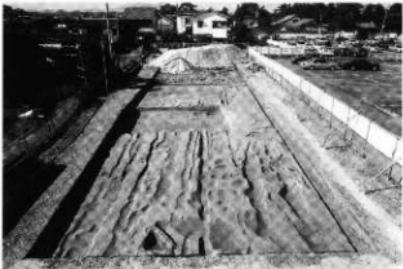
C. 出土遺物 土器、瓦塊類、木製品等が遺物整理箱70箱分出土した。大半は瓦塊類である。

土器 奈良・平安時代の土師器(杯・壺)、黒色土器A類(器種不明)、須恵器(杯・壺・壺・平盤)、須恵器の円面鏡と、室町時代の14~15世紀の土師器(皿・羽釜)、瓦器(碗)、瓦質土器(鉢・擂鉢)、青磁(碗)がある。

瓦塊類 大半は室町時代の井戸S E502の瓦積みに利用されたものである。平瓦・熨斗瓦・壇のほか、奈良時代の軒丸瓦(6125型式A種、6235型式C種、6236型式F種、6316型式M種)、軒平瓦(6663型式B・F・H・J種、6675型式A種、6710型式D種、6712型式G a種、6719型式A種、6721型式D・D b種、6732型式Q種、6761型式A種、6764型式A種、6775型式A種)や平安



第16-1次調査 A発掘区西半部(東から)



第16-1次調査 A発掘区東半部(東から)



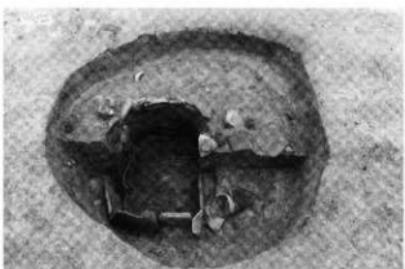
井戸S E 501(西から)



第16-1次調査 B発掘区全景(南西から)



井戸S E 502(北から)



性格不明遺構 S X 801(南から)

時代以降の軒丸瓦(巴紋)、軒平瓦がある。奈良時代の軒瓦の多くは西大寺旧境内や西隆寺跡で出土している。なお、室町時代の土坑SK603の埋土からも平安時代以降の軒丸瓦(巴紋)、軒平瓦や埴が出土した。

D.まとめ 奈良～平安時代の遺構は、重複関係から少なくとも2時期の変遷があったことが把握できた。SD第16-1次発掘区の西寄りで大型の建物やその一部とみられる柱列を確認したことから、この付近に大型の建物が複数存在した可能性がある。

室町時代の遺構の形成時期は14～15世紀の間におさまるようである。井戸があることや土坑から出土した土器の多くが日常雑器であることから、調査地付近が当時居住地であった可能性がある。

I. SD第16-3次調査の概要

SD第16-3次調査地が位置する四坪南東隅の一条南大路の遺存地割と認識できる水田においては、南隣接地で平成14年度にHJ第480-2次調査(45m²)を実施している。調査の結果、耕作土下に暗灰色のシルトや粘土が約3m堆積することを確認し、水田化する前は流路であったことがうかがえた。

今回の調査は、四坪の南東隅の様相を把握することや一条南大路の遺存地割と認識できる水田の形成過程を確認することを主な目的として実施した。



第16-2次調査 A発掘区(北から)



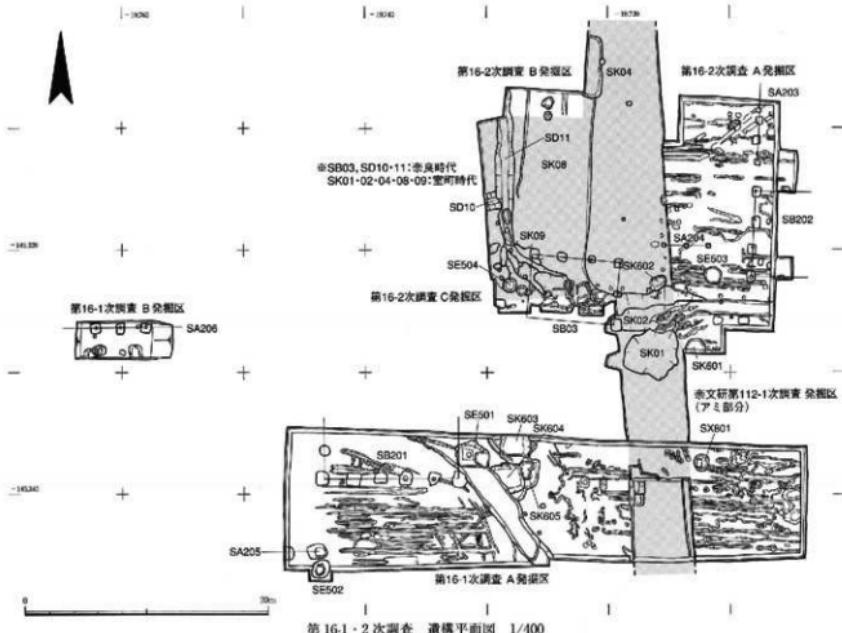
第16-2次調査 A発掘区北部分(北から)

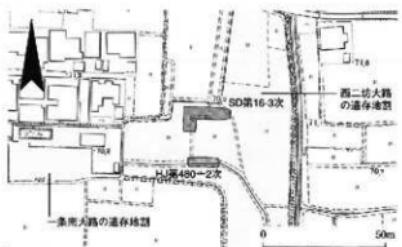


第16-2次調査 A発掘区(北から)



第16-2次調査 C発掘区(南から)





調査地と周辺の水田 1 / 2,000 (基図は奈文研作成の地形図)

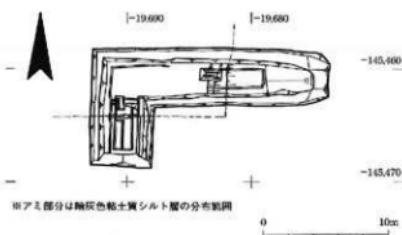
A. 層序 基本的には、造成土（厚さ1.4m）、黒灰色粘土質シルトの耕作土及び灰色砂質シルトの床上（ともに厚さ0.1～0.2m）の下で青灰色砂質シルトブロック・シルト混じり砂層（以下ブロック・砂層と記す、厚さ0.9m）となる。ブロック・砂層の下は、発掘区の西辺では青灰色砂質シルトの地山、東辺では灰色砂疊層となることを一部深く掘り下げて確認した。地山上面の標高は68.6mで、周辺の調査地より2～3m低い。ただし、発掘区の東部分と南西部分では床上の下が暗灰色粘土質シルト層（厚さ0.9m）になり、その下で灰色砂疊層となる。

ブロック・砂層は、分布範囲がかつての水田地割とほぼ対応することから、水田造成に伴う盛土の可能性がある。暗灰色粘土質シルト層と灰色砂疊層は水成の堆積層で、層相から前者は湿地、後者は流路を反映するとみる。

B. 遺構・遺物 遺構検出はブロック・砂層の上面で行ったが、溝や土坑といった遺構はみられなかった。

出土遺物は、土器、瓦類、木製品が遺物整理箱1箱分である。ブロック・砂層から室町時代（14～15世紀）とみられる瓦質土器残鉢片が出土した。発掘区の東寄りで確認した暗灰色粘土質シルト層から江戸時代（17世紀中葉以降）の肥前系陶器碗片が、同南西寄りで確認した暗灰色粘土質シルト層から曲物、下駄、漆器椀等の木製品がそれぞれ出土した。

C.まとめ 発掘区南西寄りや東寄りで確認した暗灰色粘土質シルト層は、南隣接地で平成14年度に実施した市H J第480-2次調査地で確認した耕作土下の堆積層と様相がよく似ていることから、相互に対応すると判断する。今回の調査地で確認した地山上面が周辺の調査地より低いことや、層相及び暗灰色粘土質シルト層の出土遺物の時期を勘案すれば、一条南大路の遺存地帯が認識できる水田は、室町時代以前の切通し状を呈する流路が江戸時代頃に埋没した後に開発されたと考える。室町時代以前の流路は、一条南大路の位置を踏襲することから人为的に掘削されたもので、その際に四坪南辺部は切土により大幅に改変されている可能性がある。（安井宣也）



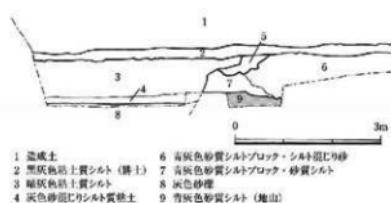
第16-3次調査 道構平面図 1/400



第16-3次調査 発掘区全景（西から）



第16-3次調査 発掘区西壁（南東から）



- | | |
|-----------------|-------------------------|
| 1 淀成土 | 6 青灰色砂質シルトブロック・シルト混じり砂層 |
| 2 黒灰色粘土質シルト（耕土） | 7 青灰色砂質シルトブロック・砂質シルト |
| 3 細灰褐色粘土質シルト | 8 灰色砂層 |
| 4 灰色砂質ビシルト質耕土 | 9 青灰色砂質シルト（地山） |
| 5 灰色砂質シルト | |

第16-3次調査 発掘区西壁断面図 1/100

2. JR 奈良駅南特定土地区画整理事業に係る調査 平城京左京五条五坊一・二坪、東四坊大路、条間北小路の調査 第506次

調査次数	IJJ 第506次
事業内容	J R 奈良駅南特定土地区画整理事業
届出者名	奈良市長
調査地	奈良市大森町123-1他

調査期間 平成15年11月7日～平成16年3月3日
調査面積 638m²
調査担当者 立石堅志、原田憲二郎



第506次調査 発掘区位置図 1/6,000

奈良市教育委員会では、平成13年度から事業地の発掘調査を実施しており、今年度で3年目となる。昨年度までに、9箇所4,703m²の発掘調査を行った。今年度は連続立体交差関連公共施設整備事業に係る調査として実施した。事業地はJR 大和路線、桜井線および主要地方道奈良生駒線の南に広がる水田地帯であり、東から西へと緩やかに低くなる沖積地上に位置する。また、事業地中央には用水路が西流している。南北方向の地形はこの用水路付近に向い緩やかに下がっている。今回の調査地は事業地の最東端で、JR 桜井線に接する位置にある。

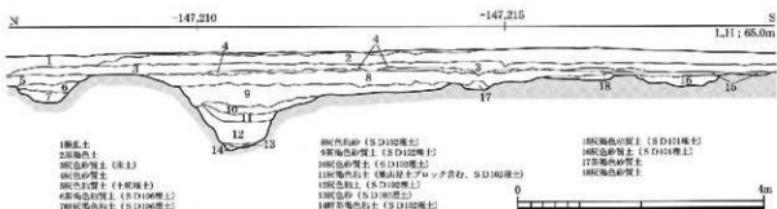
調査は昨年に引き続き、平城京左京五条四坊十六坪、五坊一・二坪及び東四坊大路、条間北小路の想定地で行い、当初2箇所、計880m²の発掘区を設定した。後に遺

構の密度が高いことなどから1箇所638m²に調査箇所を減じ、総面積を縮小して実施した。検出した遺構には弥生時代と奈良時代以降のものがある。昨年度の調査に引き続いて、当該調査地周辺に弥生時代の遺跡が広がることを明らかにし得た。なお、報告に際して用いる遺構番号については、昨年度までの例に従い、坪ごとに古墳時代以前の遺構に2桁の番号を、奈良時代以降のものに3桁の番号を付している。これらの番号は今後の各坪調査での通し番号とする。

I. はじめに

東四坊大路と五条条間北小路との交差点、およびこれに面する五坊一・二坪の各宅地の一部にかけて、638m²の範囲で発掘区を設けた。発掘区北側で、昨年度実施したHJ486次発掘区と接する位置にある。

発掘区内での基本的な土層序は、耕作上である黒褐色土以下、灰色砂質土、灰褐色砂質土と続き、現地表下約0.4mで黄白色粘土または黄褐色粘土を主とする地山となる。発掘区内での地山は、東から西へ向かって緩やかに低くなっている。また、南北の方向では中央の条間北小路付近に向かって緩やかに下がる。東四坊大路と条間北小路との交差点付近では、流水による浸食の影響でさらに低くなっている。地山の標高は発掘区北東で64.2m、北西で64.0m、中央東で64.1m、同西で63.9m、南東で64.2m、南西で63.9mである。発掘区北端では、この地山上面に弥生時代後期の遺物を包含する黄灰色粘質土の堆積が認められる。昨年度実施した市HJ486次調



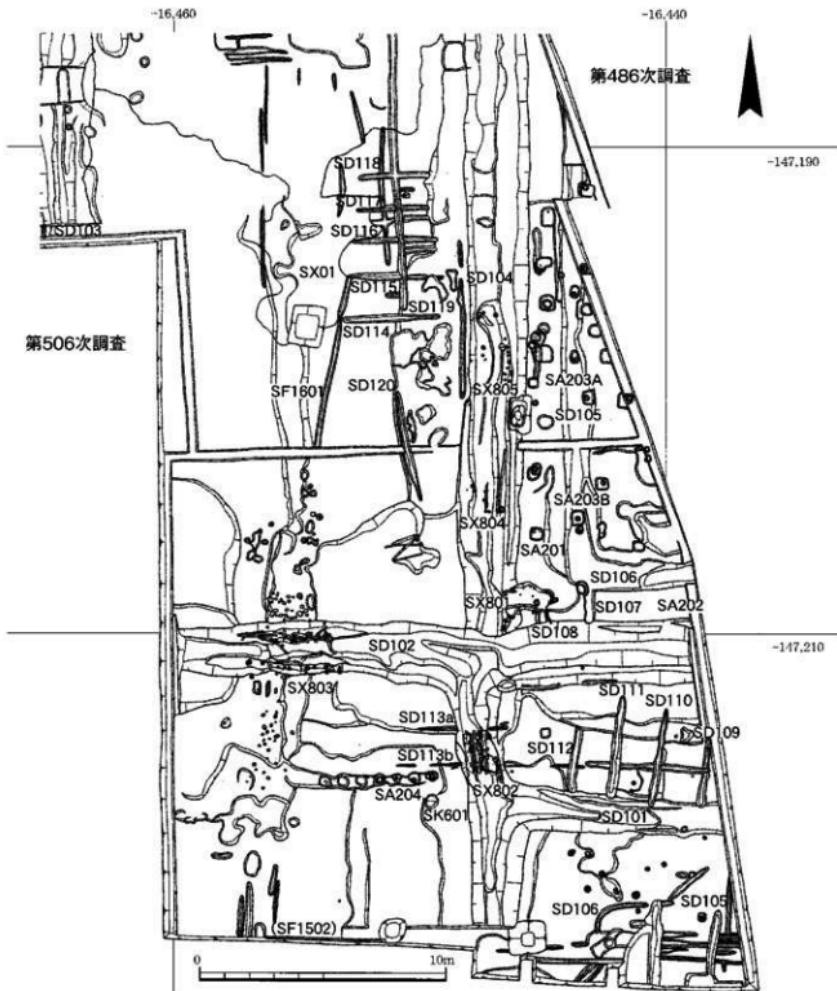
第506次調査 発掘区東壁上層図 1/80

査区の南辺でも同様の堆積土を検出してお、これに統く弥生時代の遺物包含層である。また、発掘区南東隅でも同様に、地山の黄褐色粘土上面で弥生時代の遺物が出土する溝を検出している。今回の発掘区内ではこれ以外の弥生時代の遺構は確認できなかったが、発掘区南へ更に広がる可能性を示した。

II. 検出遺構

遺構は、前述の弥生時代の遺構以外は奈良時代以降の

もので、基本的に黄褐色粘土もしくは黄白色粘土上の地山上面で検出した。検出遺構には、東四坊大路、同東側溝、五条条間北小路、同南北両側溝、橋、御溝護岸、五条五坊一坪の西面及び南面を覆る築地塀、同雨落溝、排水暗渠、掘立柱建物・堀、溝、土坑がある。また、東四坊大路と五条条間北小路との交差点を検出したが、条間北小路の北側溝が大路路面を横断し、西に流れることが明らかとなったことは特筆すべき事である。



第506次調査 遺構平面図 1/200

S F1601は東四坊大路である。東四坊大路は、昨年度北側での市HJ486次調査で東西両側溝を検出しておらず、側溝心々間距離で17.4mの幅員があることが明らかになっている。今回の調査では東側溝を検出し、東側溝西肩から約12m分の路面を検出した。路面上には、これまでと同じく特に舗装などの造作は見られなかった。路面の横断面形状は、HJ486次調査では東側溝から西側溝への片流れとなっていたが、今回の発掘区内地では路幅の中央付近から両側溝へ向かい緩やかに下る蒲鉾状となっている。また、大路の中軸線に合わせて、条間北小路北側溝SD102に橋S X803が架けられていた。この橋近くでは、側溝流水の溢れによる浸食を受け、側溝の最終埋没段階では通行可能な路面として幅3m程度が残るのみであった。この状況は、条間北小路北側溝SD102の南側の大路路面でも同様にみられ、側溝流水が路面へ想像以上に大きく溢れていたことが窺える。更に、条間北小路北側溝が横切るところの大路の路面には、流水による地山の浸食痕が非常にはっきりと細い溝状に残っていた。

S F0102は五条条間北小路である。南北両側溝を検出しておらず、側溝心々間距離で6.7mの幅員がある。平成13年度HJ477-1次調査において、左京五条四坊間路との交差点付近で同小路南北両側溝を検出しておらず、この際には側溝心々間距離が5.8mであることが明らかになっている。大路路面と同じく、路面上に舗装などの造作は認められなかった。小路の中軸線よりやや南寄りで、東四坊大路東側溝SD104に橋S X802が架けられる。

S D104は東四坊大路東側溝である。条間北小路北側溝SD102より北側では幅22~25mで南に流れる。これが後に路面側へと溢れ、最終埋没段階には幅8m余りにも広がる。宅地側の溝肩は垂直に近く落ちるのに対し、路面側は溢れによってなだらかとなる。宅地側からの深さは0.6m、一部に溝肩の浸食を防ぐため、護岸を設けている箇所を認めた。うち、護岸S X804では側板とこれを留める杭を検出した。護岸S X805では、杭の痕跡のみが溝底両側に並ぶ。溝底の標高は北端最深部で63.6m、条間北小路北側溝SD102への合流部では63.3mである。一方、条間北小路北側溝SD102の南側でも、当初幅2m程度であったものが路面側への浸食により3.5m程度へと広がり、最終的には7.5m以上にまで溢れる。また同じく宅地側からの深さは0.6mで溝肩が垂直に近く落ちるのに対し、路面側はややなだらかに落ちる。条間北小路南側溝SD101と合流し、橋SX802にあたるところで流水による溝底の抉れが見られ、やや溝が深くなる箇所がある。溝底の標高は南端最深部で63.5m、条間

北小路北側溝SD102への合流部では62.9mである。この溝底の標高差から見ても、東四坊大路東側溝SD104の排水は南北ともに条間北小路北側溝へ集められ西へ流されていたことは確実であろう。溝埋土は大きく4層に分けることができる。最下層は灰褐色砂質土もしくは一部に灰色砂、第2層は茶褐色砂質土もしくは灰色粘土、第3層は灰褐色粘土であり、最上層に灰色粘砂が堆積する。この第3層以上が堆積する段階では側溝は埋まり、大きく路面上へ溢れているようである。さらに最上層が堆積する段階に至ると、交差点付近は溢れた水で湿地状となり、路面の高い部分だけがかろうじて道路の形態を保っていたような状態であったろうことが窺える。

S D102は五条条間北小路北側溝である。幅2.5m、検出面からの深さ1.3mの溝、西に流れる。一坪の宅地側である溝北肩は垂直に落ちるのに対し、路面側である南肩はやや緩やかに落ちる。溝はこの周辺の基幹水路となっており、頻繁に溝浚えが行われていたようである。このため浚渫の困難な橋S X803の構築される部分の溝底が他の溝底よりも一段高い状態に残っている。この橋S X803の上流部分のSD102内の下層と第2層には、多くの祭祀遺物が溜まっていた。人面墨書き器やミ



第506次調査 発掘区全景（東から）



東四坊大路東側溝SD104（北から）

ニチュア土器、肅串、大型人形等がある。さらに、側溝北岸に接して多くの馬の骨が出土していることも特筆すべきであろう。溝底の標高は東端で、63.0m、東四坊大路東側溝 SD104との合流箇所で62.9m、橋 S X803の溝底で63.1m、西端で62.8mとなる。溝埋土は基本的に4層であり、下層から灰色粘土もしくは灰褐色粘土、灰色砂質土、茶褐色砂質土であり、最上層に灰色粘砂が堆積する。最上層の段階では南に4.5～5.2mほどに広がり、条間北小路路面から南側溝上面にまで大きく溢れる。また、最下層に灰色砂が堆積することもある。

S D101は条間北小路南側溝である。素掘りの溝で、発掘区西端では幅1.5m、検出面から0.25mと他の条坊側溝に比して狭く、浅い。東四坊大路東側溝 SD104との合流部に向かうにつれ、徐々に深くなるとともに路面側へ広がり、幅2m程度になる。溝底の標高は東端で64.0m、合流部で63.5mである。埋土は基本的に2層あり、下層から灰色砂質土、灰褐色粘質土である。東四坊大路東側溝 SD104との合流部に近づくにつれ、最上層に条間北小路北側溝 SD102から路面を越えて溢れた灰色粘砂が溜まっていた。



五条条間北小路北側溝 SD102 と SD104（北から）



五条条間北小路南側溝 SD101（手前）と SD102・SD104 の合流部（南京から）

S X802は条間北小路 SF0102の中軸よりやや南に合わせて、東四坊大路東側溝 SD104に架けられた木橋である。溝肩に杭を打ち込み、これに橋桁、橋板を架ける構造であると考える。橋板は既に崩落していたが、一部流出せずに落ち込んでいるものも見られた。造り替えは見られない。ただ、溝がほとんど埋没した状態で、小路路面から大路路面まで人頭大の石を置き、飛び石状の石橋を造っている。

S X803は東四坊大路 S F1601の中軸に合わせて、条間北小路北側溝 SD102に架けられた木橋である。溝肩に杭を打ち込み、これに橋桁、橋板を架ける構造であると考える。橋板は既に崩落していたが、一部流出せずに落ち込んでいるものも見られた。橋脚の杭の並びや打ち込み深さなどから、橋は最低3時期の造り替えがあることが窺える。更に最終段階では橋 S X802と同様に大路路面から溝を越え対面の路面まで人頭大の石を置き、飛び石状の石橋とする。また、当初の橋板が落下した時点で、橋板の一部を用い護岸する。

S D105・106は東四坊大路東側溝 SD104、条間北小路北側溝 SD102と約1.4～1.7mの空間を隔て平行する素掘りの溝である。幅1～1.2mで、検出面からの深さ0.2～0.3m。宅地を開むようにL字状に曲がる。溝埋土は茶褐色粘質土である。側溝との間に坪を限る何らかの閉塞施設があり、その雨落ち溝となろう。ただ、検出した空間の幅を考えると、築地跡を想定することは難しく、小規模な土壠もしくは掘立柱跡であったろうか。

S D107は前述の雨落ち溝から条間北小路北側溝 SD102へ繋がる溝である。幅0.4m、検出面からの深さ0.2mの素掘り溝で、溝壁面は垂直で溝底は平らである。暗渠となろうか。

S A201・202は条坊側溝と前述の雨落ち溝 SD105・106に挟まれた平坦な空間地である。一坪の南・西を限る閉塞施設の存在を考える。ただし、土壠などの痕跡は全く残っていない。

S A203はS A201の空間地に並ぶ掘立柱列である。重複関係からA・Bの2時期がある。S A203Aは空間地の中央で南北4間の柱列を検出した。柱間は北から1.8～2.1～2.7mである。S A203BはAの柱穴に重複する南北3間の柱列。柱間は北から1.8～3.6～2.4mである。これらの柱列はおそらくは閉塞施設の一部であろう。特にA列は柱穴の深さも深く規模も大きい。ただし、南北に繋がる柱穴が認められないためその詳細は不明。

S X801は一坪の南西隅、塙 S A201がS A202へ曲がる角につくられた、東西2.1m、南北1mの平面長方形の土坑である。坑底は西に下がり、東四坊大路東側溝



木橋 SX802 検出状態（南東から）



大型の人形木製品出土状態（南から）

S D104に開く。検出面からの深さ約0.5m。坑内の長辺に沿って側板を立て、径2cm程度の杭を打ち、留める。その後裏込土で側板を押さえるものであろう。当初は溝 S D108で、条間北小路北側溝 S D102に繋がっていたが、後に溝が先に埋められたものと考える。坑底の標高は西端で63.4mである。

S D108はS X801からS D102に繋がる溝である。幅0.4m、検出面からの深さ0.3mである。溝肩は垂直に掘り下げられ、底は平坦に近い。溝底の標高は63.6m。

S D108、S X801の両遺構の性格については、坪のこの位置に構築する遺構の類例がなく、現状では不明である。また、溝 S D108の溝底の標高と条坊側溝のそれを比較するとかなりの高低差があり、どのような状況でこれが機能していたのかを窺い知ることはできない。

S A204は東四坊大路路面で検出した小土坑列である。条間北小路 S F0102の路面南端及び橋 S X802の南端に合わせ、東西に並ぶ。西端はほぼ橋 S X803の東端に位置を合わせ止まる。ほぼ0.7m間隔で並ぶ小土坑は、平面は一辺0.4mの方形であるが、いずれも掘形が浅く底面に凹凸がある。柱を立てたのではなく、石を据えたような痕跡に見える。またこの土坑列東端の土坑から南に1mのところに、土坑 S K601がある。こちらは掘形も深く柱穴であろうと考える。ただしこれに統く柱穴はない。ともに、構と小路の位置を意識しているように見え、何らかの標識とする意図があったのであろうか。

S D113は条間北小路路面から橋 S X802上を通り、東四坊大路路面へ続く、幅1.5mで平行する2条の溝である(a・b)。荷車などの轍の痕跡と考えられる。東四坊大路東側溝 S D104がある程度埋没した段階で、崩壊した木橋を覆う埋土の上面に人頭大の石を置き、石橋とした時期の遺構である。

S D109~112は条間北小路 S F0102の路面で検出した、ほぼ1.8m間隔で平行する4条の溝。溝は、国土方眼

方位北で東に10°振れる。各溝は、それぞれ幅0.3m、検出面からの深さ0.3m程の素掘溝で、埋土からは奈良時代の遺物が出土。条間小路の両側溝の埋没よりも早くに埋まっているが、側溝開削の当初には開いていた可能性もある。これと同様な溝が東四坊大路路面上にもある。

S D114~118は東四坊大路 S F1601の路面で検出した、ほぼ1.5m間隔で平行する5条の溝。これらの溝はほぼ国土方眼方位に沿う。溝の幅は、それぞれ0.2m程度、検出面からの深さ0.2m程度の素掘溝である。同じように大路東側溝 S D104の埋没よりも早くに埋まっているが、大路側溝開削当初の時期には開いていた可能性もある。

S D119はS D114~118に重複する溝で、これらの溝よりも新しい。昨年度調査 HJ486次発掘区から続く。幅0.2m、検出面からの深さ0.2mの素掘溝である。S D120はS D119の南で検出した幅0.2m、検出面からの深さ0.1m程度の溝。全長4.4mを確認した。北で西に振れる。S D105は発掘区南東隅で検出した幅0.3m、検出面からの深さ0.3mの素掘溝である。二坪宅地内での溝。S D109~112までの溝と同方位を示す。埋土から8世紀代の遺物が出土。S D106は同じく発掘区南東部、二坪の宅地内で検出した溝である。東四坊大路東側溝 S D104、条間北小路南側溝 S D101から約3m離れ、これに平行するよう L字状に曲がる。条坊側溝に平行することから、残存状態が悪いが坪北西の閉塞施設の雨落ち溝であった可能性も否定できない。全長3.5m程度を検出。溝埋土からの出土遺物はなく、時期は不明である。 (立石堅志)

出土遺物 弥生時代の土器、石器、8~9世紀初頭にかけての瓦塊類、土器類、土製品、銭貨、金属製品、木製品、漆製品、石製品、鉄製品、骨、種子類が合わせて遺物整理箱112箱分と、木橋 S X802・803の部材77点がある。弥生時代のものは、素掘溝と遺物包含層のほか、条坊道路側溝等から出土した。土器は、小片で詳細な時期は不明であるが、庄内式と思われる破片も

ある。石器には、弥生時代遺物包含層から出土した花崗岩製敲石？1点、凝灰岩製磨製石斧？1点、剥片2点、条坊道路側溝等から石鏃1点、削器1点、搔器3点、楔形石器4点、二次加工のある剥片1点、剥片15点、碎片1点、原石1点がある。特に記述のないものの材質は、サスカイトである。奈良～平安時代のもののうち、瓦塼類、土製品、錢貨、金属製品、木製品、石製品、铸造関連品、獸骨、種子類は表にまとめた。末尾の数値は基本的に破片数だが、接合したり、明らかに同一個体と判別できるものは1点に数えた。瓦塼類には他に丸瓦・平瓦がある。

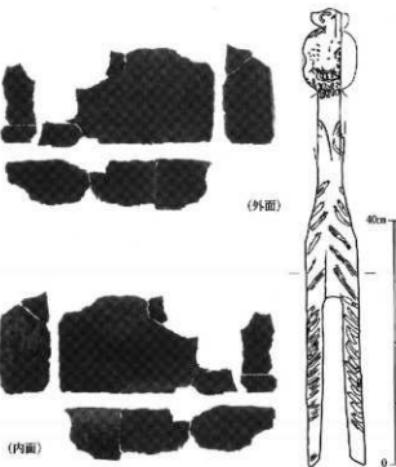
条坊道路側溝や同時期の遺構で出土した土器類には、土師器杯・皿・杯蓋・碗・高坏・甕・壺・鉢・盤・羽釜・甕・瓶・ミニチュアの甕と瓶と壺、須恵器杯・皿・杯蓋・碗・高坏・甕・壺・壺蓋・鉢・盤・羽釜・平瓶・横瓶・ミニチュアの壺蓋と平瓶、黒色土器A類杯・皿・碗・灰釉陶器碗がある。以上には、墨書きのあるものがあり、判読可能なものも表にまとめた。また、窯記号と考えられるものを含む線刻を施したもののが16点、人面墨書き土器（土師器甕・甕B）が20点ある。この他に製塙土器の小片が遺物整理箱1箱分ある。陶規類は円面規が3点あるが、このうち脚部に胡人の頭部を意匠したもののが1点ある（写真）。残存する破片は高さ6.5cm、幅8.15cm、厚さ3cmである。また、須恵器杯B底部外面や蓋内面を利用した転用規がある。

木製品は、橋の部材を除くと遺物整理箱10箱分あり、その大半が部材などを割り引いて薪などに使用した燃えさしや、用途不明品、剪定した枝類などである。

漆製品はSD102第2層からの乾漆箱がある（写真）。

出土遺物一覧

遺物	瓦塼類	土製品	銭・金銀製品	本製品（主なもの）	石製品・陶器・鐵器	獸骨（馬）	植物類
SD104 番下層	軒平：形式不明1、甕1 土馬9	神功開寶1	鐵鋸1		手板岩加工刀1、凝灰岩 標示材1、鐵淨4		輪核47、クルミ殻3
SD104 第2層	軒平：6666A 1、6685A 2、 6703A 1点、形式不明1、 二彩丸瓦1	土馬6				小片	
SD104 第3層	軒丸：形式不明1						
SD104 番上層	軒丸：形式不明1	土馬3、土埴1			手板岩加工石製品1		
SD102 最下層	軒平：6644C 1、甕2		鐵鋸1	大型人形1、人形1、青 牛2、矢針？1、刀形か 鉈形1、雷針？1		下顎骨1、神 部10	輪核32、梅核8、 重皮7、ウリ細胞子 10
SD102 第2層	甕3	土馬4		剪製帶金具（板 馬形1、複複2、人形1、 月1）、佐波理 曲物蓋板1、曲物底板内 側張筋1		下顎骨1、右 半部1、肩部 7	輪核68、梅核2、 半部1、肩部 2、クルミ殻2、重皮 2、燕屋皮1
SD102 第3層	甕2点	土馬6、土埴1				輪核1	
SD102 番上層	軒平：6644A 1、6682B 1、 6685A 1、6721H 1、形式 不明1、甕11	土馬2			仙取石製部材、滑石製 襷1、被熱した凝灰岩 片1		輪核1
SD104 102層上層	軒平：6703A 1点、甕1点				ガラス環周1		
SD103 のあふれの埋土	甕2	土馬1、不明土製品1	萬年通寶1			圓片2	
SA304							
SD113		土馬1					
SD114		土馬1					
SD116		土馬1					



SD102 出土乾漆箱、大型の人形 1/8

一番大きな破片が底面の一角で長辺16.5cm、短辺10.9cm。側の破片は高さ5.9cm。底面との接点がないため、正確な高さは不明だが、6.0cm程に復元できる。詳しい分析は行ってないが、構造は粗布を芯に両面に漆を塗り重ね、外面は紙の粉漆のような光沢のない仕上げになっている。内面は紙を1層貼って黒漆を薄く塗る。側縁の芯は、さらに外側に幅6mm程の布を貼っている。表面の粗さから未製品の可能性もある。漆に関しては、他に土師器や須恵器の壺、皿の内面や底部外面に漆が付着したものがSD104最下層～第2層、SD102最下層～第3層、SX801の最上層から合わせて18点が出土。（原田香織）

Ⅲ まとめ

今回の調査では、東四坊大路と五条条間北小路の交差点を明らかにすることができた。道路の交差点での調査例はこれまで20数例が知られているが、大路、小路それぞれに側溝を検出し、かつ架構遺構を残していた例は無く、非常に貴重な成果を得ることができた。また、大路の路面を条間小路の一方の側溝が横切り、排水が困られる例も希有である。半城京条坊計画の施工に当たり、どの程度当時の地形が影響したのかを考える上で良好な資料になると見える。条坊遺構を今回のように広範囲に渡って検出した例は無く、今後出土遺物の検討が進むことにより、当該地での条坊遺構の存続と廃絶に至るまで

の過程を明らかにすることができるであろう。最後に今回検出した条坊遺構の国土座標成果を記し、今後の参考とする。
(立石堅志)

東四坊大路東側溝

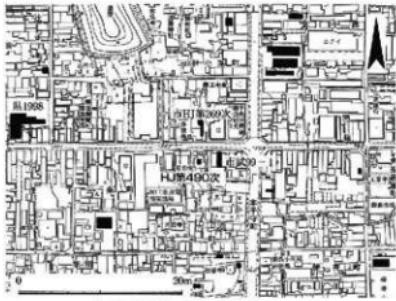
X = -147,210.0	Y = -16,447.0
同西側溝 (HJ486次成果)	
X = -147,192.0	Y = -16,464.08
五条条間北小路北側溝	
X = -147,210.45	Y = -16,455.0
同南側溝	
X = -147,217.45	Y = -16,440.0

出土器物一覧

番号	出土位置	種類	器種	記載状況	現文・文字情報	土器の時期	備考
1	SD104板下層	須恵器	杯 A + 直 A	底部外側 「曲(曲)たは肉(肉)」	8C ~		
2	同上	須恵器	帶々型	底部外側 □□〔大・ト〕	8C ~		
3	同上	須恵器	杯 B	底部外側 「曲(曲)成(入名)」	8C後半~		
4	同上	土師器	作々型	底部外側 □〔内: 〕	8C		
5	同上	須恵器	杯 A	底部外側 「曲(曲)たは空(空)」	8C ~		
6	同上	須恵器	杯 A	1号縦・底部 内外面 <内> □ 「(空)」 □	8C	板用範 内全面帶行書	
7	同上	須恵器	杯 B	底部外側 「(内)」	8C後半~		
8	同上	須恵器	杯 B	底部外側 「(曲)たは+ (記号)」	8C末~9C初	灯舟用	
9	同上	須恵器	杯々型	底部外側 大筋	8C ~		
10	同上	須恵器	杯々型	底部外側 「(記号)」	8C ~		
11	SD104板下層・SD101下層	須恵器	杯 B	底部外側 甲	8C ~		
12	SD104板下層・第2層	須恵器	杯型	頂部外側 「曲(曲)たは天(天)」	8C ~		
13	SD104板下層	須恵器	杯々型	底部外側 □〔竹〕	8C ~		
14	同上	須恵器	杯 A	底部外側 <内> □ 「(空)らし(空)」 <外> 「(曲)たは記号」	8C ~		
15	SD104第3層	須恵器	杯 A	底部外側 豆	8C ~		
16	SD104表上層	須恵器	杯 A	底部外側 「(千)」	9C ~ ?		
17	SD102板下層	須恵器	杯 B	底部外側 □〔葉〕 □	8C後半~		
18	SD102板下層・第2層	須恵器	直 C	底部外側 西口	9C前半		
19	SD102第2層	土師器	直 A	底部外側 直(直字) 空	9C前半		
20	同上	須恵器	耳壺	頂部外側 □〔施(シ)〕	8C ~		
21	同上	須恵器	杯 B	底部外側 甲	8C ~		
22	同上	須恵器	杯 B	底部外側 □〔大・ト〕	8C末~9C初		
23	同上	須恵器	直 C	底部外側 供(キラ)	8C		
24	同上	須恵器	杯 A + 直 C	底部外側 内	8C末~		
25	同上	須恵器	杯・直 B	底部外側 大	8C ~		
26	SD102板2層・第3層	須恵器	直 C	底部外側 両穴	9C前		
27	SD102板下層	須恵器	杯 B	底部外側 豆	8C ~		
28	SD103あづみの原土	須恵器	直	底部外側 □〔居(ク)〕	9C		
29	遺物包含層	須恵器	杯 B + 直 B	底部外側 「(大・ト)」	8C ~		

3. 平城京跡（左京四条六坊八坪）・奈良町遺跡の調査 第490次

調査次数	HJ 第490次	調査期間	平成15年4月10日～4月24日
工事内容	個人住宅建設	調査面積	30m ²
届出者名	専念寺 菊池 耕	調査担当者	中島和彦
調査地	奈良市上三条町15番地		



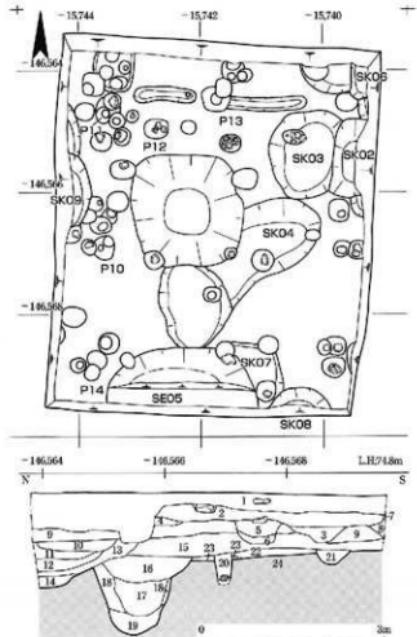
第490次調査 発掘区位置図 1/6,000

調査地は平城京左京四条六坊八坪の北辺部にあたり、三条大路の南側に面する。また中世以降は興福寺・東大寺の門前町として発展してきた奈良町遺跡にある。調査地の専念寺は、慶長年間の創建で、現在の本堂、方丈、門は元禄以降の造営と伝えられる。境内には、永享2年（1430年）2月26日銘の五輪塔の残欠、永禄4年（1561年）7月4日銘の宝篋印塔残欠と他1基の宝篋印塔残欠がある。

周辺の発掘調査では、古代から中世の遺構遺物が多く見つかっている。調査地の東に隣接する調査（市99-1次調査）や、道路をはさんだ北側の浄教寺境内の調査（市HJ第269次調査）でも、各時代の遺構遺物が見つかっているが、特に平安時代後半から鎌倉時代にかけての遺構遺物が多いのが特徴である。

専念寺境内は南北に長く、北から車庫・本堂・墓地と境内が三分され、発掘区は北側の車庫の部分にある。発掘区内の層序は、大きく4層に分かれ、上から近現代の層（1・2）、江戸時代遺物包含層（9）、鎌倉・室町時代遺物包含層（15）、平安時代後半遺物包含層（22・23）で、地表下約1.0mで暗黄褐色土の地山となる。地山面の標高は約73.4mで、遺構検出は地山上面で行った。

検出した遺構には井戸1基、埋甕遺構1基と約60基の土坑と柱穴がある。その内約8割が平安時代後半（11世紀末～12世紀後半）のもので、他に室町～江戸時代の各時期のものが少量ある。以下主なものを記す。



- | | | |
|----------|---------------------|-------------------|
| 1. 鹿鳴土 | 9. 梅苔柄丸土 (斑土含む) | 17. 四川色土 |
| 2. 深紅褐色土 | 10. 梅苔柄丸土 | 18. 紫褐色土 |
| 3. 桃紅色土 | 11. 梅苔柄丸土 (斑含む) | 19. 紫紅色粘土 |
| (斑多く含む) | 12. 梅苔色土 (斑多く含む) | 20. 黑青色土 (灰褐色土含む) |
| 4. 桃紅色土 | 13. 梅苔色粘土 | 21. 紫紅色粘土 |
| 5. 黒青色土 | 14. 桃紅色粘土 | (深褐色土ブロック含む) |
| 6. 黑青色土 | 15. 桃紅色粘土 (土器片多く含む) | 22. 深褐色粘土 |
| 7. 桃紅色土 | 16. 梅苔柄丸土 | 23. 黑青色粘土 |

第490次調査 遺構平面図・東壁土層図 1/80

平安時代後半の遺構には、SK01～04、SE05等がある。SK01～04はいずれも11世紀後半頃の土坑で、特にSK01からは土器が完形で数多く出土した。SK01は平面方形で、断面形はU字形で深さ約1.6mあり、形態から井戸の可能性も考えられるが、湯水はほとんどなかった。土器は上から0.7mまでの層内から多く出土した。SE05は12世紀中頃のもので、深さ約1.3mまで掘削したが、底には至らず、井戸枠も確認出来なかった。ここからも

完形の土器が多く出土した。発掘区全域で検出した径約0.3mの小柱穴群もこの時期のものと考えられる。調査面積が小さく建物としてまとめられなかつたが、これら小柱穴から鋳造関係の遺物が出土するものがあり注目される。鋳造関係遺物には鋳型（P10出土以下同じ）、とりべ（P11・13・14）、鉄滓・銅滓・鰐羽口他（P12他）がある。奈良町遺跡内において中世以前の鋳造遺物の出土は珍しい。

室町時代の遺構にはSK06～09がある。SK06は14世紀後半頃、SK07・08は16世紀頃の土器が少量出土した。

江戸時代の遺構にはSK15・SX16がある。SK15はSK01上面にある17世紀中頃の土坑、SX16はSE02上面にある18世紀頃の瓦質土器深鉢の埋立土坑である。いずれも下層の遺構と重複しているため平面図には示していない。また発掘区北西部には、鉄滓を多く含む上坑が壁面に見られる。

出土遺物には、土器類が遺物整理箱12箱、瓦類が遺物整理箱3箱、金属製品（鉄釘等）銭貨1点（判読不能）、鋳型、とりべ、鉄滓、銅滓、砥石、安山岩剥片、骨、桃種がある。

とくにSK01からの出土土器が多く、遺物整理箱6箱分あり、他に少量の瓦類、不明銅製品1点、鉄滓、桃種

1点がある。土器類は破片で1078点出土しており、土師器皿・羽釜、瓦器碗・皿、須恵器甕、白磁碗がある。土師器皿が約53%、瓦器碗が約37%あり、両者で9割を占める。瓦器碗の見込みの暗文には、放射状、格子状、ジグザグ状、螺旋状のものがあり、ジグザグ状のものが多い。11世紀後半の良好な一括資料である。

P10出土の鋳型片はすべて小片で4点あり、何の鋳型かは不明である。鋳型の1つは一辺約4m、厚さは約2.5mで、平坦な面に蓮華文があり、平たい板状の製品が想定される。この他にも遺物包含層から時期不明の鋳型が1点出土している。これも何の鋳型かは不明だが、径約14mの製品が復元できる。

今回の発掘調査で検出された遺構のうち、そのほとんどが平安時代後半のもので、この時期頃から遺構数・遺物量が増加し出することがわかる。また、この時期に周辺で鋳造品生産が行われていたことも確認でき、中世の奈良町遺跡の形成を考える上で貴重な資料が得られた。鎌倉・室町時代の遺構は今回の発掘調査区内では少ないと、周辺の発掘調査成果からみて、引き続き人々が居住していたことはうかがえよう。江戸時代には専念寺が創建されると伝えられるが、それを示す資料は得られなかった。

(中島和彦)



第490次調査 発掘区全景（南から）



第490次調査 発掘区全景（北西から）

4. 平城京跡（右京七条一坊十四坪）の調査 第491次

調査次数	H J 491次
工事内容	医建設
届出者名	医療法人康仁会
調査地	奈良市七条町95-1、100-1・3・7

調査期間 平成15年4月24日～7月9日
 調査面積 1560m²
 調査担当者 武田和哉 池田裕英



第491次調査 発掘区位置図 (1/6,000)

調査地は、平城京の条坊復原では右京七条一坊十四坪の西辺中央付近に該当しており、敷地の西辺部には西二坊大路が想定されている。

調査地周辺では過去に調査例が5件あり、このうち北隣の調査（市HJ第97次）や北東隣の調査（市HJ第427次）、東隣の調査（県1992年度調査）では、奈良時代の掘立柱建物や井戸、中世の土坑、井戸等が検出されている。

今回の調査では、計画されている建築物により遺構が

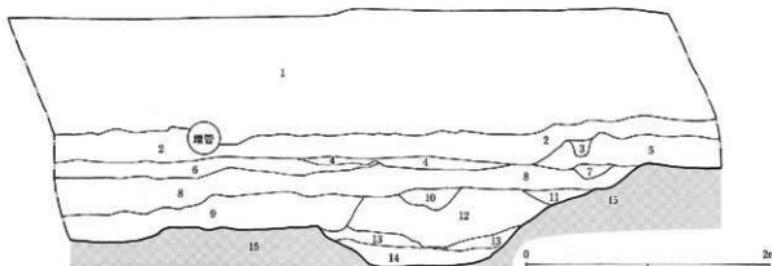
破壊される部分を中心に、南北2箇所の発掘区を設定した。調査面積は計1560m²である。

発掘区内の基本層序は、北・南発掘区とともに（西壁・東壁）では、上から順に、造成土（約1.0m）、黒灰色土（=旧耕作土 0.2~0.3m）、灰茶色砂質土（=旧床土約 0.1m）と続き、地表面下約1.3m程度で、黄灰色（または青灰色）粘土（砂質土）の地山層に至る。地山上面の標高は、北発掘区北西隅付近では56.7m前後、また南発掘区南東隅付近では、56.7~56.8mであった。

検出した主要な遺構は、奈良時代の掘立柱建物、掘立柱列、条坊御溝、性格不明の遺構、平安時代後半の井戸、平安～鎌倉時代の井戸、室町時代の粘土探掘坑である。

S D01は、北・南発掘区とともに、西端で検出した。北隣の調査でも検出されており、位置的にみて、西二坊大路の東側溝と考えられる。ただし、南発掘区では後世の遺構や搅乱等により大きく削られ、残存状況はよくな。一方、北発掘区では長さ約8m分を検出した。深さは約0.8mを測る。幅は発掘区内では西肩を検出していないので不明であるが、約4.8m分を確認した。埋土は基本的に3層に分かれているが、局所的に下層の下に更に灰色砂層が堆積していた。この最下層には、奈良時

W LH58.3m E -19.005

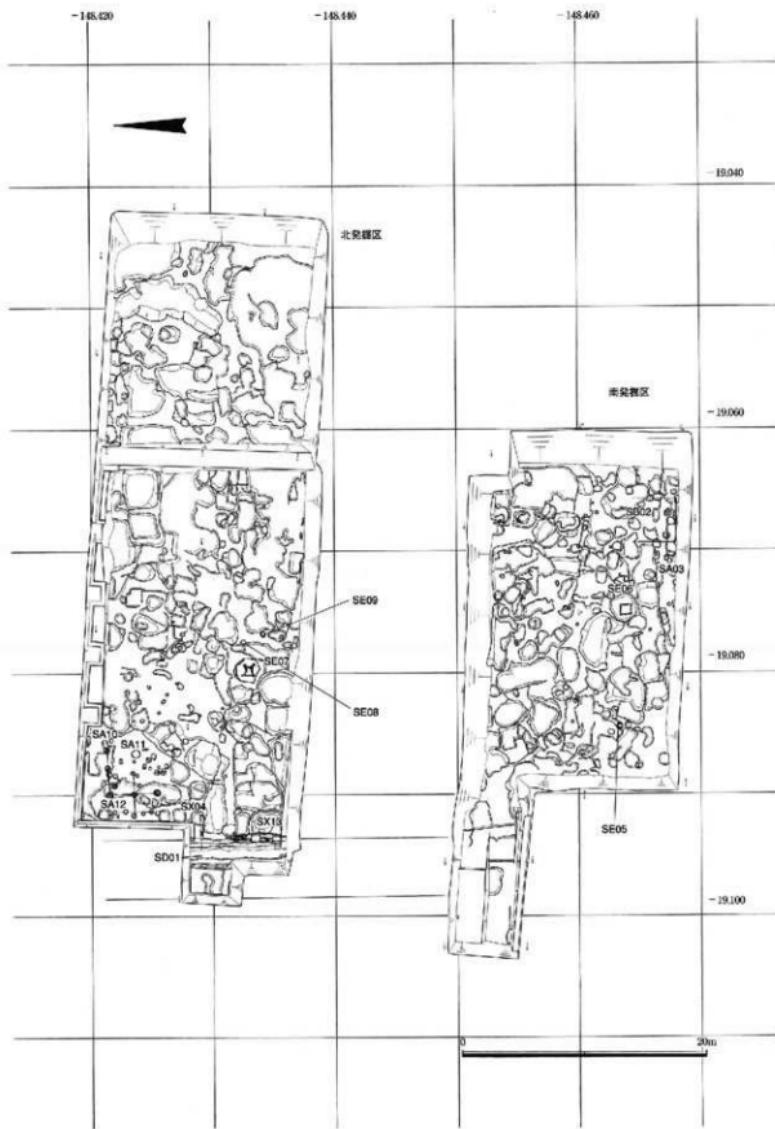


1：造成土 2：灰黒色土（旧耕作土）3：淡黒色土 4：灰茶色砂質土 5：灰褐色砂質土 6：灰茶色砂質土（旧床土）7：暗茶色砂質土 8：暗褐色土〔S D01 上層埋土〕9：黄橙色砂質土〔S D01 上層埋土〕10：暗褐色土〔S D01 上層埋土〕11：茶褐色土+灰褐色土〔S D01 上層埋土〕12：橙褐色砂質土+灰褐色砂質土〔S D01 上層埋土〕13：茶橙色砂質土+灰褐色砂質土〔S D01 中層埋土〕14：暗灰色砂〔S D01 下層埋土〕15：青灰色（黄褐色）粘土〔地山〕

北発掘区西北隅 S D01 付近 北壁土層図 1/40

代の遺物が含まれ、中層の埋土には10世紀頃の遺物が、また上層の埋土には11世紀中頃から12世紀中頃にかけての遺物が、それぞれ含まれていた。こうした状況から、

S D01は奈良時代以降、平安時代後半頃までは機能していたことがうかがわれる。なお、S D01溝心の国土地標値は、X = -148430.0 Y = -19,096.1 (旧座標第VI系)。



第491次調査 遺構平面図 1/400

S B02は、南発掘区の南東隅付近で検出した奈良時代の掘立柱建物である。柱間は、東西2間（約3.6m）、南北1間（約1.8m）分を検出した。建物の北側は後述の室町時代の粘土探査坑によって削平されている。

S A03は、南発掘区の南東隅付近で検出した奈良時代の掘立柱列である。柱間は、東西2間（約3.6m）分を検出した。遺構の北側は、室町時代の粘土探査坑により著しく削平されており、また南側は発掘区外となるために詳細は確認できなかったが、建物となる可能性がある。

S X04は、北発掘区の北西隅で検出した奈良時代の性格不明の遺構。前述のS D01の東端付近から東へと延びている。長さ約2.3m分を検出。幅は約0.2m、深さは約0.1mで、溝状に掘られた掘形の内部の西寄りの場所に丸瓦が門面を上にして置かれていた。周囲の遺構の様相からみて、この場所には築地の存在が推測されるところから暗渠のような施設ではないかと考えられる。

S E05は、南発掘区の南西隅付近で検出した井戸。上部は粘土探査坑により削平を受けていた。検出面からの深さは約1.2mである。内部には曲物の枠材が3段分残存しており、枠の径は約0.3m、残存している高さは約0.6m。枠内からは奈良時代の土師器・須恵器とともに、11世紀後半頃の土師器・黒色上器B類が出土した。

S E06は、南発掘区の中央やや南よりで検出した井戸。掘形は、平面ほぼ円形で、径約2.3m、検出面からの深さは約1.8mある。内部には方形の縦板組構柱横棟留めの木製の枠材が構築されていた。枠の内法の一辺は約0.9m、残存する井戸枠の高さは約1.4mを測る。枠内から奈良時代の土師器・須恵器とともに、11世紀前半頃の土師器・黒色土器B類が出土した。

S E07は、北発掘区の中央よりやや南西寄りの場所で検出した井戸である。S E07の掘形は室町時代の粘土探査坑によって削平されている部分があり、明確な掘形の規模は不明であるが、径は2.0m程度の平面円形になるとみられ、検出面からの深さは最大約1.3mを測る。内部には方形縦板組構柱横棟留めの木製の枠材が剥えられていたが、土圧で潰されたような状態で検出した。枠の一辺は約0.9m、残存する高さは約1.2mある。枠内の埋上から奈良時代の土師器・須恵器に加えて12世紀中頃の土師器・瓦器が出土した。

S E08は、北発掘区の中央よりやや南西の場所、S E07の東側約3m付近で検出した井戸。上部は粘土探査坑により削平されていた。掘形は平面円形で、残存している掘形の規模は東西約0.5m、南北約0.4m。検出面からの深さは約0.1mしか残っていない。内部には曲物の枠材が1段分あり、枠の直径は約0.4m、残存している高さは

約0.1mである。枠内から12世紀後半の瓦器が出土。

S E09は、北発掘区の中央よりやや南西寄りの場所、S E08の南南東側約3m付近で検出した井戸である。掘形は平面円形で、径は約0.7m、検出面からの深さは約0.5mである。掘形を縁取るように、瓦や土器が敷き詰められており、その中に径約0.3mの曲物を2段に重ねて置いていた。残存する枠の高さは約0.4mある。上・下の曲物の接合部の外側には瓦片が複数入れられていて、井戸枠の役割を果たしている曲物を支える目的で入れられたものと推定される。小規模ながら、湧水層まで到達していることから井戸の可能性が高い。枠内から12世紀後半～末頃の土師器・瓦器が出土した。

S A10・11・12は、北発掘区の北西付近で検出した掘立柱列である。いずれも柱穴の掘形は最大でも約0.5m程度の規模に留まり、多くの柱穴の底には河原石を据えている。遺物は少ないが、瓦器が出土している穴がいくつかある。状況からみて12世紀頃の掘立柱列ではないかとみられるが、あるいは他の柱穴が削平されているなどの理由で、本来は建物である可能性もある。

このほか、北発掘区の東端から中央部・西側南半部、また南発掘区の西端と南東隅付近を除く全域で、室町時代の粘土探査坑を検出した。掘形は、平面不整形で、径2～6m程度のいくつかの単位に分かれるものとみられ、深いものでは約1mにまで達している。埋土からは16世紀前半頃の大和型擂鉢が多く出土した。擂鉢の多くは磨滅した痕跡が無く、またいくつかはほぼ完形で出土していることから、何らかの意図により置かれたものと推測される。探査の対象は、地山の黄灰色粘土であった模様で、同層の下層にある暗灰色粘土の上面に到達すると概ね掘削を止めている形跡があり、また青灰色砂質土の地山となっている北発掘区の北西部では探査をしていないため、それ以前の遺構が残存する結果となっている。南発掘区の南東付近では、黄灰色粘土の地山が堆積しているにも関わらず、粘土探査をしていない箇所もある。

鎌倉・室町時代の時期における粘土探査については、農閑期に田畠を借地して実施していたことが古文書などの記載にみえる。南発掘区南東隅付近には畦畔の痕跡があり、その部分から南側は遺構が良好に残存していて、発掘区外南側へと続いていくように見受けられる。本調査地東隣における調査（県1992年度）でも、良好な黄灰色粘土の地山が存在しつつも、粘土探査が行われておらず、奈良時代の遺構が残存していることが確認されている。こうした様相は、当時の粘土探査の実態を知る上で貴重な手がかりである。

S X13は、北発掘区の北西隅、S D01の東岸のすぐ

東隣で検出した南北方向の溝状の遺構である。掘形はS X04同様溝状に掘られており、長さ約5m分を確認した。幅は0.2~0.4m、深さは約0.1mであり、掘形内部には丸瓦を伏せて南北方向に置いている。詳細な時期については不明であるが、遺構の重複関係からみて、室町時代の粘土探査坑より新しいので、少なくとも16世紀前半よりは後の遺構と思われる。

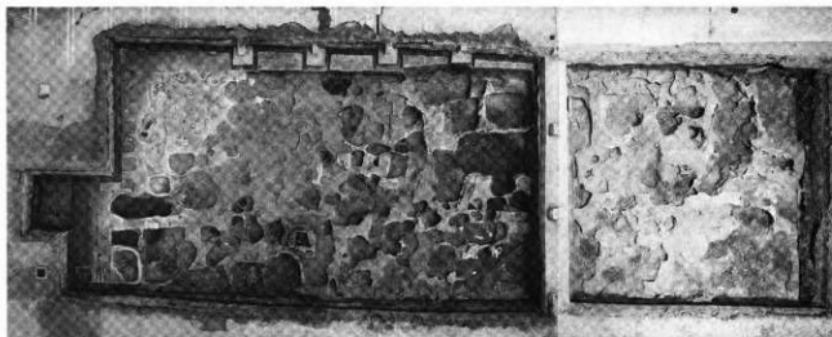
遺物は、整理箱約110箱分が出土した。土器・土製品は、古墳時代の埴輪、奈良・平安時代の須恵器・土師器・黒色土器（A・B類）・製塙土器・灰釉陶器・綠釉陶器・土馬・竈・墨書き土器、鎌倉時代の土師器・瓦器、室町時代の瓦質土器擂鉢、中国産磁器（白磁・青磁）がある。

瓦塊類は、奈良・平安時代時代の丸・平瓦、軒丸瓦（6012B 1点・6282G 1点・6316G 1点・6236D 2点、平安時代以降2点）、軒平瓦（6663H 1点、6691A 1点、

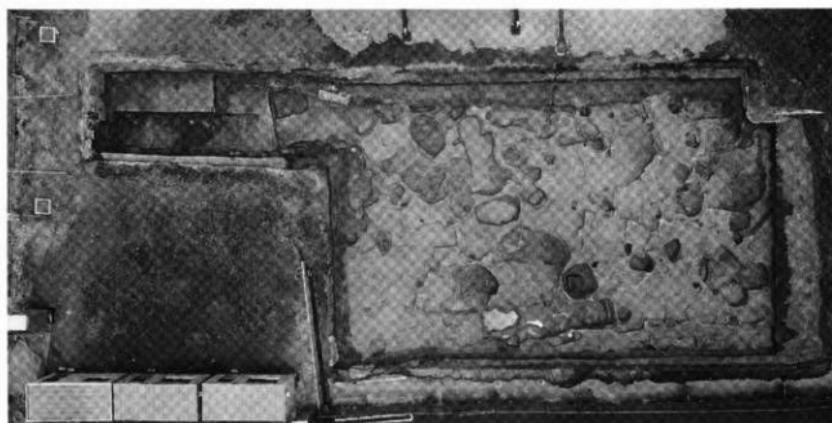
平安時代以降1点）、道具瓦（熨斗）、埠、時期不明の上管がある。

このほかに、曲物、鉄釘、鐵滓、鐵羽L1、石製品などが出土した。石製品には、石鈴（丸鞘・巡方各1点）および未製品4点がある。調査地の近隣で実施した過去の調査においても、同様に石鈴とその未製品が出土していることから、その関連性が注目されよう。

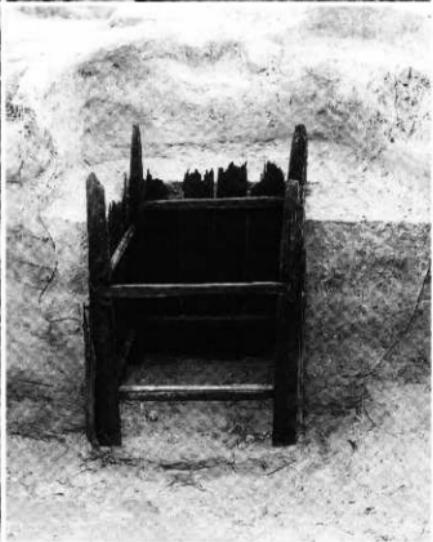
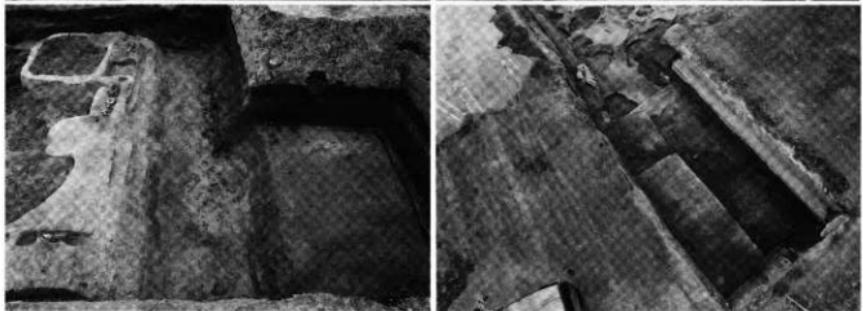
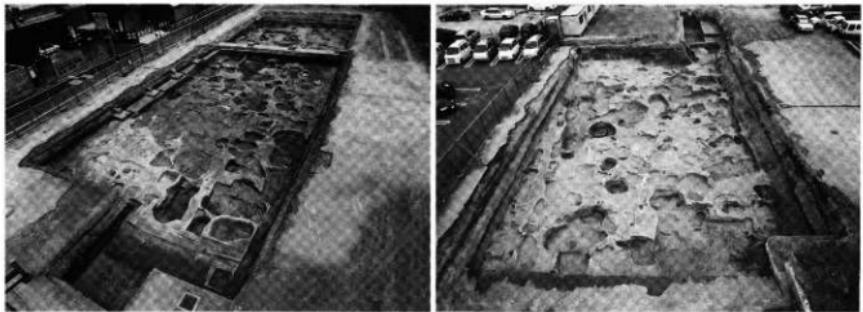
遺構に関しては、室町時代の粘土探査坑により、それ以前の遺構の多くが削平されていたが、井戸等の深い遺構は残存部分を検出できた。生活に直結した井戸が存在していることやわずかながらも奈良時代の掘立柱列等を確認したことで、調査地が奈良時代より利用されていたことが判る。鎌倉時代の井戸や柱穴も複数確認したこととも併せ、奈良～室町時代にかけての土地利用の実態を知る上で重要な成果である。（武田和哉・池田裕英）



第491次調査 北発掘区全景（垂直写真）



第491次調査 南発掘区全景（垂直写真）



上段左：北発掘区全景（西南西から）

中段左：北発掘区西側・SD01（北から）

下段左：北発掘区全景（東南東から），秦所寺両塔遠望

上段右：南発掘区全景（東から）

中段右：南発掘区西側部分（北東から）

下段右：南発掘区井戸 SE06

5. 六条野々宮古墳・平城京跡（右京六条三坊六坪）の調査 第492次

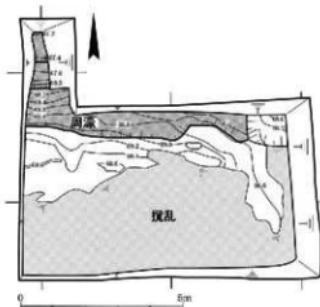
調査次数	HJ 第492次	調査期間	平成15年5月6日～5月29日
事業名	個人住宅増築	調査面積	52.5m ²
届出者名	個人	調査担当者	三好美穂
調査地	奈良市六条一丁目497-4番地		



第492次調査 発掘区位置図 1/6,000

I. はじめに

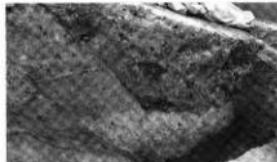
届出地は、西ノ京丘陵の東縦斜面途中にある住宅地の一画で、付近一帯は近年宅地化が進み、造成工事等により丘陵本来の地形を留めていない所が随所に見られる。平城京の条坊復原では、右京六条三坊六坪の南東部に



第492次調査 遺構平面図 1/150



第492次調査 発掘区西壁土層図 1/100



発掘区西壁断面（東から）

- 1.砂岩
- 2.茶褐色砂質土
- 3.茶褐色白泥質土
- 4.茶褐色砂質土
- 5.茶褐色土
- 6.茶褐色砂質土
- 7.茶褐色土
- 8.茶褐色砂質土
- 9.茶褐色土・灰白色粘土
- 10.茶褐色土
- 11.茶褐色土・灰白色粘土
- 12.茶褐色砂質土
- 13.茶褐色土
- 14.茶褐色土
- 15.茶褐色土
- 16.茶褐色土
- 17.河岸埋土

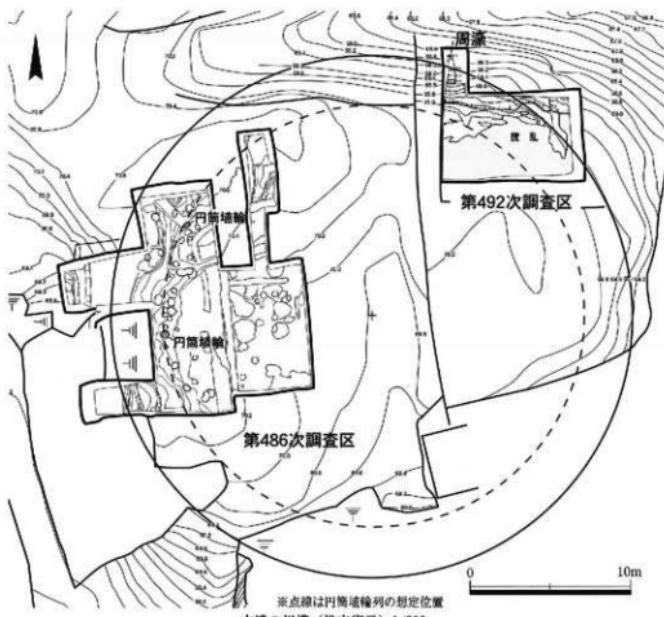
相当する。これまでの六坪内の調査は、今回の届出地の西隣で平成14年度（市HJ第489次調査）に実施しており、奈良時代の掘立柱・土坑の他に、円筒埴輪の据付穴、江戸時代の濠等を検出した。奈良時代の遺構の検出は、丘陵上に位置する六坪内の宅地の利用状況を知る貴重な成果となった。

さらに、円筒埴輪の据付穴を検出することができ、5世紀前半頃には古墳が築造されていたことも明らかになっただけでなく、古墳の墳丘自体は、奈良時代以降に壊されたことも判明した。

今回の調査は、市第489次調査地のすぐ東隣に位置していることから、奈良時代の遺構の検出及び古墳の形状・規模等古墳の遺存状態を把握することも調査課題に加えて実施した。

II. 検出遺構

発掘区の大半が現代の擾乱により遺構面が大きく削平されており、発掘区南半分では造成土の下がすぐに黄褐色裸地で、遺構は残存していなかった。幸い、発掘区北半分までは擾乱は及んでおらず、古墳の周濠を検出することができた。周濠は、長さ約40m分、幅0.85m分を確認した。検出面からの深さは約1.3mある。市HJ第489次調査成果から見て、古墳の北東部を廻る周濠の一部と考えられる。周濠内の底部には、上から順に暗茶褐色土（0.2m）、暗褐色土（0.1m）、黃灰色砂質土が混ざった茶褐色土（0.1~0.2m）堆積していた。最下層の茶褐色土には、円筒埴輪の破片と8世紀代の須恵器B、壺胴部片が含まれており、少なくとも北東の周濠は奈良時代には壊されずに存在していたことが窺われる。周濠埋土と造成土との間に堆積している3.6~10の層に



は、14～15世紀の土師器が若干包含されている。堆積状態からみて、14～15世紀頃までは周濠がそのまま溝状に残っていたが、室町時代以降になって人為的に一挙に埋め立てられ、平坦になったものと考えられる。

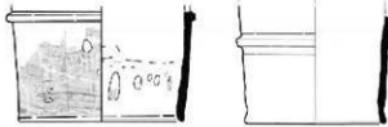
Ⅲ.まとめ

古墳の形態と規模は、埴輪の据付け穴および周濠との位置関係から推測すると以下のようになる。

古墳の形態

HJ 第489次調査では、埴輪の据付け穴を2基検出しており、これ以外にも多数の小穴を検出している。小穴からは埴輪は出土しなかったが、一連となって弧を描くような状態で分布していることから、本来は埴輪の据付け穴であったと考えられる。また、据付け穴と周濠との位置関係から古墳の形態を考えると、円墳か前方後円墳になる可能性が高い。古墳の南辺部が壊されているために明確なことは不明だが、仮に円墳とした場合の規模は、径30m前後の大規模な古墳となろう。

（三好美穂）



第489次調査出土円筒埴輪 1/8



平城京左京四条六坊十坪・奈良町遺跡の調査 第493次

調査次数	IJ 第493次	調査期間	平成15年5月20日～6月30日
工事内容	共同住宅建設	調査面積	176m ²
届出者名	株式会社ケイ・エム・ケイ	調査担当者	立石堅志、松浦五輪美、原田憲二郎
調査地	奈良市東城戸47、椿井町20		



第493次調査 発掘区位置図 1/6,000



第493次調査 発掘区全景（南から）

I. はじめに

当該地は、平城京三条坊復原では左京四条六坊十坪の東端は中央にあたり、調査地の東に坊間東小路が想定される。また、同時に奈良町遺跡の範囲内にあり、近世東城戸町の北端にあたる。

ちょうど北側の路地が東城戸町と椿井町の境界となつておらず、当該敷地の西側の一部に椿井町の張り出しがある。届出者の現況は、駐車場であるが、駐車場以前は銀行の建物があったことが知られている。この銀行の建設時に幾つかの民家敷地を統合し、ひとつの敷地として造成されたものと思われ、この際に東城戸町椿井町にまたがる形での現在の敷地が形成されたのであろう。

北側の路地は、東から西に向かって低くなつておらず、当該地の旧地形もこれにあつた雑墳状の敷地割りであったことが窺える。

発掘区は、敷地の北東部分に東西20m、南北10mで設定したが、最終的に進入路にかかる東南の24mを除外する形で調査を実施した。

II. 検出遺構

発掘区内では、造土の下に厚さ0.6mの炭、焼土を含む暗褐色土を主とする幾層もの堆積があり、その間に何時期かの遺構面があることが窺えた。一部に焼土の堆積層も認められる。地山は基本的に黄褐色粘土であり、その標高は、発掘区東端で764～765m、発掘区西端で763mである。

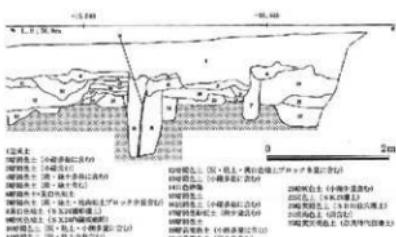
発掘区東側の一部には奈良時代の整地土があることを確認した。遺構は、基本的に地山直上で検出した。

検出した遺構には、掘立柱建物、土器埋納坑、井戸、埋甕遺構、方形石組遺構、土坑、柱穴がある。以下に、遺構の概要を述べる。

遺構は大きく奈良時代、鎌倉時代から室町時代、江戸時代から近代のⅢ期に分けることができる。

奈良時代 掘立柱建物（S B01）1棟、土器埋納坑（S X02）1基がある。

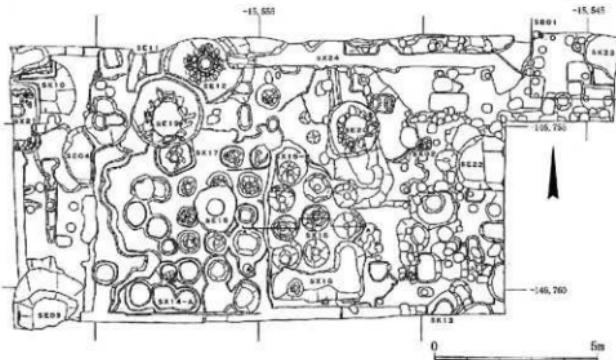
S B01は、東西1間以上、南北1間以上の掘立柱建物であり、発掘区外へのびる。柱間は検出した東西の柱間で3.6m(12尺)と広く、柱穴も一辺



第493次調査 発掘区東端北壁土層図 1/80



S X02・土器器臺出土状態（東から）



第493次調査 上層遺構平面図 1/150

2.0mと非常に大きい。

S X02は、S B01の南西で検出した土器埋納遺構である。径0.4m、検出面からの深さ0.23mの小坑に土師器皿8点と壺2点、銅鏡12点を埋納していた。坑内の底部に須恵器と土師器の破片を敷き、その上に銭貨を置いて、さらにこれらの上に土師器壺を下向き置く。次に壺の上に5点の土師器皿を重ねて載せ、最上位の皿に銭貨を置く。これに裏返した土師器皿で蓋をし、この上にも銭貨を置いている。更にもう1点皿を裏返して重ね、最後に下向きにした土師器壺で蓋をする。

また、土坑の壁際からも銭貨が重なった状態で出土している。納められた銭貨は1点は和同開珎であるが、他は鋳化のため判読することができない。地鎮遺構の可能性がある。

鎌倉時代～室町時代 井戸 (S E03～06・11) 5基、埋甕遺構 (S X14～17) 4基、土坑 (S K07～10・13) 5基がある。

井戸 S E03は発掘区南西端で検出した一辺2.2mの平面方形井戸である。枠はない。南北1.8mまで確認したが、発掘区外南に統ぐため南北方向の規模は不明である。検出面からの深さは約1mである。井戸底の標高は75.3m。12世紀代の土師器片と瓦器片が少量出土した。

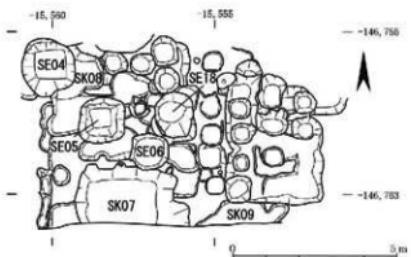
S E04は発掘区西端で検出した一辺1.6mの平面隅丸方形の井戸である。枠はない。検出面からの深さは約1.9mである。井戸底の標高は74.3m。埋土から12世紀代の土師器皿・羽釜片が少量出土した。

S E05はS E04の南東で検出した一辺1.4mの方形井戸である。枠はない。検出面からの深さは約1.0m。底部は平らで、標高は75.05m。埋土から12世紀代の土師器皿・羽釜片が少量出土した。

S E06はS E05の南東で検出した一辺1.1mの平面隅



第493次調査 発掘区全景 (東から)



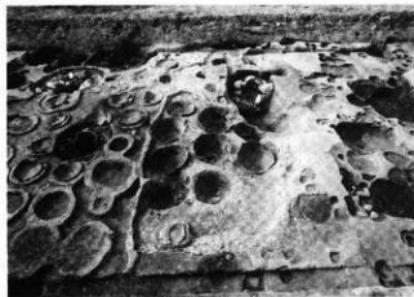
第493次 下層遺構平面図 1/150

丸方形の井戸である。枠はない。検出面からの深さは約1.0m。底部は平らで、標高は75.2m。埋土から土器類など多くの遺物が出土した。

S E11は発掘区北、S E12・S E19と重複する位置で検出した井戸である。東西1.0m、南北1.6mを確認した。他の井戸との重複により遺構の平面形は確認できなかつた。検出面からの深さ約1.0mまで掘削したが、湧水があ



井戸 SE12 (北から)



埋窯遺構 SX14 ~ 17 (南から)



1 黄褐色砂粘土 (地山粘土ブロック含む, SX12楕円形埋土)
2 深灰色土 (地山粘土ブロック含む, SX14-A楕円形埋土)

SX14-15 立面図 1/80

り、それ以上の掘り下げは隣接井戸の崩壊の危険があつたので断念した。井戸枠は既に抜き取られており、地山の黄褐色粘土と砂礫によって埋められていた。埋土から12世紀代の土師器皿・羽釜片、瓦器片が少量出土。

土坑 SK07は発掘区南端で検出した東西30m、南北1.7m以上の平面長方形の土坑で、東側の一部が東へ0.5m広がる。掘形は発掘区外南へ続く。検出面からの深さは0.5mである。

SK08はSE04の東側で検出した東西15m、南北1.5m、検出面からの深さが0.3mの平面不整形の土坑である。重複関係からみて、SE04よりも古い。

SK09はSK07の東側で検出した東西25m、南北0.7mの平面不整形の土坑である。検出面からの深さ0.2mと浅い。重複関係からみて、SX15・16よりも古い。

SK10は発掘区北西隅で検出した東西20m、南北1.6mの平面横円形の土坑。検出面からの深さ約0.6m。11

世紀後半の土師器皿、12世紀初頭の瓦器碗が少量出土。

SK13は発掘区南東で検出した長辺1.0m、短辺0.6mの平面隅丸方形の土坑である。一部発掘区外へ延びる。検出面からの深さは約0.6m。11世紀末から12世紀初頭の土師器皿・羽釜、瓦器碗・皿等が少量出土した。

埋窯遺構 発掘区中央で大甕を据付けた土坑を検出した。何回かの造り替え、重複がみられ、比較的の長期間にわたって遺構が存続していたことが窺えた。

ただし、甕が残るものも、体部上半は全て甕内に落ち込んだりして欠損しており、また抜き取られて据付け痕跡を留めるだけのものも多い。甕内や抜き取り痕に焼土が堆積しているものもある。

SX14は、発掘区中央西より検出した埋窯遺構である。大きく3時期の造り替えがある。古い順にC-B-A期とした。

C期・B期では、甕はいずれも抜き取られ、据付けの痕跡を留めるのみである。C期は東西4列、南北4列、B期は東西3列、南北4列で甕を据える。

また、最終のA期では東西4列、南北5列以上の据付け痕跡が認められ、大甕の底部が残存しているものが8個あった。うち、常滑窯産大甕が6個、備前窯産大甕が2個である。

さらにA期では西側に甕が追加して据えられたようで、北側に2個、南に1個の列からずれた据付け痕跡がある。3時期ともに甕を据える範囲に大きな掘形を設け、これに甕を並べ、据え置くものである。

SX15は、SX14の東側で検出した埋窯遺構である。東西約3.0m、南北約4.0mの掘形に、東西3列、南北4列で甕を据える。後に、北側に新たに1個の甕を追加している(15-B)。甕は体部下半まで残るもののが8個あり、いずれも常滑窯の製品である。14世紀後半から15世紀前半にかけてのものがある。甕内には焼土が堆積しており、体部上半が落ち込んでいるものもみられた。重複関係から判断して、SX14より古い時期に造られている。

SX16は、SX15の南1列と東側列の南2個について造り替えられており、掘形を掘りなおしたうえで、高を変え、新たに甕を据え直した痕跡である。このため掘形の埋土がこの部分だけ異なり、精良な黄白色粘土で埋められている。この黄白色粘土からは遺物はほとんど出土していない。

SX17は、SX14の北側で検出した埋窯遺構である。他の2つの埋窯遺構より設置面が高く、削平のため甕を設置する際の掘形の痕跡がほとんど残っていない。南1列と、東1列で計4個の甕を確認した。かろうじて甕の底部が残っており、南側の3個が常滑窯産、北側の1個

が衛前窯産である。S X14・15よりも新しい時期の遺構である。

近世から近代 井戸5基（S E12・18~20・22）、方形石組造構（S X21）1基、土坑（S K23）1基、溝状造構（S X24）1条がある。

井戸 S E12はS E11と重複する井戸である。径2.4mの掘形中央に内法0.6mの瓦積みの井戸枠を造る。検出面からの深さは3.4mに及ぶ。井戸底の標高は73.0mである。井戸最下部には瓦質上器窓の底部を打ち欠いたものを水溜として据えている。この窓の上部に10~15cm程の平らな川原石を敷き、基礎とした上に瓦を積み上げていく。平瓦が主体であり、これに丸瓦、軒平瓦等を併せて用い、隙間を河原石で詰めている。これらの瓦には、「興福寺」銘がある軒平瓦等14世紀中頃の特徴をもつものがある。また、中には14世紀後半代の常滑窯で生産された大甕の口縁部があったが、埋焼造構に用いられていたものを転用したものであろうか。埋土中からは14世紀後半代の土師器皿・羽釜、18世紀以降の土師器皿片、刷毛などの木製品が出土した。

S E18は発掘区中央で検出した長辺1.5m、短辺1.4mの平面長方形の井戸。中央に径55cm、高さ45cmの瓦製井筒を3段重ねて据える。さらに、1段分の破片が井筒内に落ち込んでいたことから、当初は4段以上重ねられていたことがわかる。検出面からの深さは15mであり、井戸底の標高は75.0mである。このような瓦製の井筒は、18世紀以降に都市遺跡を中心に多く見られる。

S E19は、S E11・12、S X17に重複する位置で検出した石組み井戸である。径2.1mの平面円形掘形のやや南側に、内法東西0.9m、南北1.0mの石積みの井戸枠を組む。検出面から0.7mまで掘り下げたが、石組みが崩壊するおそれがあったため、それ以上の掘り下げは断念。

埋土から土師器皿・羽釜片、瓦質土器鉢・羽釜、信楽窯産鉢片が少量出土したが詳細な時期は不明である。

S E20は、発掘区東央より検出した石組み井戸である。径1.6mの円形掘形の中央に内法0.6mの石積み井戸枠を組む。石組みの南側上部は南側の上坑の掘削により壊されていた。検出面からの深さは1.67mあり、井戸底の標高は74.7mである。埋土から17世紀前半の土師器皿片、常滑窯窓片、陶器片、白磁皿片が出土した。

S E22は、発掘区東端で検出した南北1.7m、東西1.5m以上の平面方形の井戸である。井戸枠は抜き取られたよう、地山の黄褐色粘土ブロックを多く含んだ土で埋められている。検出面から2.2mまで掘り下げたが、井戸底には至らず、崩壊の危険があったため掘り下げは断念した。埋土からは、17世紀代の土師器皿片、瓦質上器鉢

片が少量出土した。

土坑 S X21は発掘区西端で検出した東西0.9m以上、南北2.1mで発掘区西へ延びる方形石組造構である。方形の掘形に沿って方形の石積み枠が組まれる。石は裏込めの上で固められており、水溜めなどに利用されたものであろうか。検出面からの深さ0.3m程度である。枠内埋土から土師器皿片、瓦質土器片、国産陶磁器片が少量出土。

S K23は、発掘区北東隅で検出した東西1.0m、南北1.2mの平面不整形の土坑。検出面からの深さは0.4m。17世紀代の土師器小片が少量出土した。

S X24は発掘区北で検出した幅0.6mの溝状造構である。東西約10m分を検出した。東西両端で発掘区外北へ曲がる。検出面からの深さは約1.0mであるが、発掘区壁面での土層観察によると、より上層から構築されていることが窺え、確認できた深さは約1.4mにも及ぶ。ほぼ垂直に掘り込まれ、断面は箱状となる。中心には厚さ2cm程度の板を立てる。この緩板は底から上面にまで至っており、また、全長に渡り立てられている。坑内は非常に精良な黄白色粘土により埋められており、17世紀代の輸入白磁片が1点出土。何らかの施設の周りを囲うような性格のものであろうか。

三、まとめ

今回の調査では、古代から近代までの各時期の遺構を検出することができた。非常に多くの遺構が、重複しつつ残っており、当該地の遺跡の変遷を追うことのできる良好な資料を得ることができた。

奈良時代の遺構としては、大規模な建物の一部を検出したが、当該地周辺でこのような規模の建物が残存し、またそれを検出したのは稀有な事例である。併せて地鎮遺構も確認することができた。おそらくはこの建物に関係すると考えているが、非常に興味深い発見である。

また、室町時代に埋焼造構が集中して構築されている状況を明らかにすことができた。今回の調査でも、これらの窓が何に用いられたのかを示す資料は得ることはできなかったが、比較的長期に渡り同一地で繰り返し構築された例はこれまでに確認されていない。さらに、瓦積み井戸に転用されている瓦に、瓦当面に「興福寺」銘を持つ軒平瓦があった。これは同范品が興福寺旧境内で出土しており、14世紀中頃に比定されているものである。同時に刻印を押印された平瓦・丸瓦類、鳥糞瓦等も分割して転用されているが、おそらくは同じ場所で用いられていた瓦類であろうと想像できる。これら大量の瓦類の利用に際して、建物解体後転用のために備蓄しておくということがあったのであろうか。今後の類例の蓄積を待ち、分析していくたい。

（立石堅志）

7. 平城京跡（左京九条一坊七坪）の調査 第496次

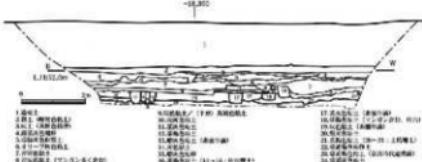
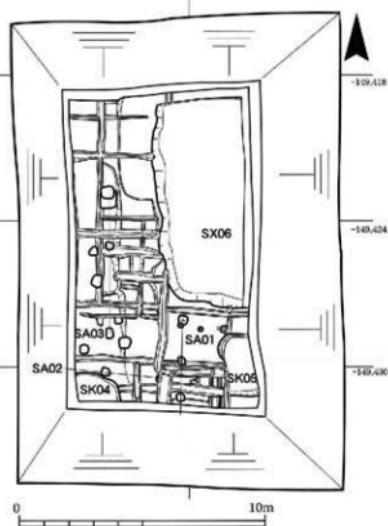
調査次数	HJ 第496次
工事内容	研究所新築
届出者名	共栄社化成工業株式会社
調査地	奈良市西九条町五丁目2番地

調査期間 平成15年6月2日～6月23日
 調査面積 263m²
 調査担当者 三好美穂



届出内地内は、これまでに2回の発掘調査を実施している。昭和63年度の市HJ第167次調査では、二・七坪の坪境小路と両側溝、雨落溝2条、井戸1基を検出した。井戸内からは銅製の分銅（平成6年度に奈良市指定文化財に認定）が出土。平成11年度の調査では、奈良時代の掘立柱構、土坑を検出している。今回の調査は、七坪内の宅地の利用状況を知ることを目的として実施した。発掘区内の基本層序は、造成土（約1.4m）の下に、耕土・床土・淡茶灰色粗砂・暗緑灰色砂質土・オーリープ灰色粘土・青灰色粘土が堆積し、地表下約2.1mで奈良時代の遺構面である暗黄褐色粘土の地山に至る。耕土・床土の下から地山までの間に堆積している土層は、周辺の調査成果から旧佐保川が氾濫した時の堆積であることがわかる。検出した遺構には、掘立柱列3条（SA01～03）、土坑2基（SK04・05）、性格不明の遺構1（SX06）、中世素掘り溝がある。遺物は、8世紀代の土師器・須恵器、瓦、13世紀の瓦器、青磁、白磁、15世紀の瓦質土器等の破片が遺物整理箱で1箱分が出土。素掘り溝以外の遺構から出土したものではなく、大半が旧佐保川の氾濫層からのものである。今回の調査地は、遺構密度は少なかったが、奈良時代には宅地として利用されていたことが判明。素掘り溝を検出したことにより、鎌倉時代頃には田畠として利用されたことが判る。それ以降は、旧佐保川が何度も氾濫し、宅地はもとより田畠としても暫くの間は利用できなかったことが窺える。

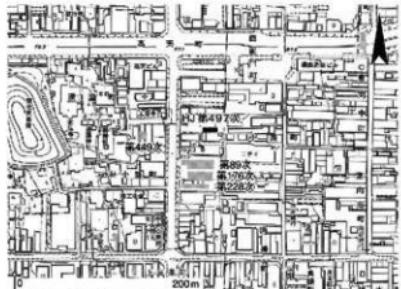
（三好美穂）



8. 平城京跡（左京三条六坊十一坪）・奈良町遺跡の調査 第497次

調査次数　IIJ 第497次
工事内容　共同住宅建設
届出者名　株式会社ビルト
調査地　奈良市林小路町1-1、1-10番地

調査期間　平成15年6月3日～6月19日
調査面積　85m²
調査担当者　中島和彦



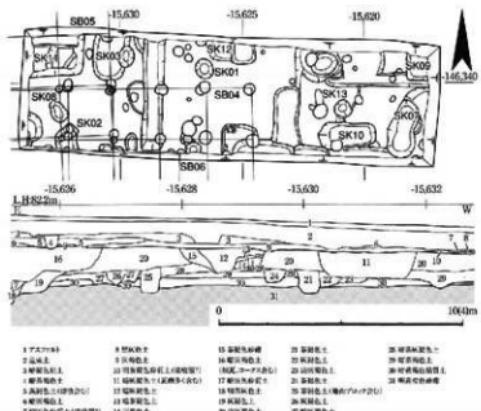
第497次調査 発掘区位置図 1/6,000

調査地は、平城京左京三条六坊十一坪の南西部にあたり、また中世以降は興福寺・東大寺の門前町として発展してきた奈良町遺跡の中心部にあたる。林小路の名は鎌倉時代には文献に現れており、調査地の南約40mの所には、前井順慶の父前井順昭の菩提所の円証寺があった。同寺は1984年に生駒市に移転し、その跡地には商業ビルが建ち景観は大きく変化している。

林小路町内では過去4回の発掘調査（市IIJ第89・176・228・449次調査）があり、いずれの調査でも奈良～江戸時代の各時代の遺構・遺物を検出しており、遺構密度の高い地域である。特に調査地南の円証寺周辺の調査（市IIJ第89・176・228次調査）では平安時代後半から鎌倉時代の土器が大量に出土しており注目される。

調査地は東西に細長く、東から西へ向かい緩やかに傾斜している。発掘区は調査地の東半部に設定した。発掘区内の層序は、大きく5層に分かれ、上から近現代の造成土・表土層（1・2）、江戸時代の上間等の整地土層（3～11）、江戸時代の遺物包含層（21）、鎌倉・室町時代の遺物包含層（30・31）、奈良時代以前の遺物包含層（32）と続き、明黄橙色砂礫（33）の地山になる。発掘区内の地山面はほぼ平坦で、標高は約80.9mある。発掘区東側に行くに従い堆積土は厚くなり、発掘区西端では地表下約1.0mで、東端では約1.3mで地山に到る。

検出した遺構には掘立柱建物3棟の他約60基の土坑と柱穴がある。これらは平安時代後半～江戸時代の各時期のものであるが、鎌倉時代のものは見つかっていない。



第497次調査 発掘区全景（北西から）

また奈良時代以前の遺物包含層を確認したが、同時期の遺構はなかった。以下主要なものを記す。

平安時代の遺構にはSK01・02があり、いずれも11世紀末頃のものである。なお、後世の遺構からもこの時期の遺物は多く出土している。

室町時代の遺構にはSB04～06、SK07・08がある。SB04は、東西2間(2.1m)以上、南北2間(4.2m)以上の総柱建物と考えられる。柱間はすべて2.1m等間である。柱穴の1つから15世紀後半以降の土器が出土した。SB05は桁行5間(9.5m)以上、梁間2間(2.1m)以上の総柱建物と考えられる。柱間は桁行が1.9m等間、梁間は2.1m。重複関係からSB04より新しい。柱穴から安山岩製の石鈴の未製品が出土した。SB06は東西2間(5.4m)以上の建物または塀と考えられ、大半は発掘区外にあり詳細は不明である。柱間は2.7m等間である。掘り込まれる層位から室町時代のものと考えられる。SK08からは15世紀前半の土器と共に五輪塔の台座が出土しているが、形態的特徴からみて時期が下る可能性がある。

江戸時代の遺構にはSK09～15があり、17世紀代のもの(SK09・10)と、19世紀代のもの(SK11～13)とがある。SK15は北辺に沿い人頭大の石を3つ並べており、石組土坑の石を抜き取った跡とも考えられる。出土遺物が少なく明確な時期は不明。SK12・13は、地面上では2つの土坑であるが、断面観察から両者は同一の土坑であることがわかる。土坑内からは瓦が大量に出土した。

出土遺物には、遺物整理箱5箱分の土器類と7箱分の瓦類、石製品(磁石、硯、石臼、石鈴の未製品)、石造物(五輪塔台座)、金属製品(鉄釘、銅版他)、鉄滓、獸骨などがある。多くは江戸時代以降のもので、特にSK12・13から出土のものが多い。

遺構一覧表

遺構番号	平面形	平面面積(m ²)	深さ(m)	年代	主要出土遺物	竪号
SK01	円形	径0.7	0.3	11世紀末	土師器皿、羽釜、瓦筒瓶、瓦滓	
SK02	不規則円形	東西0.9×南北2.0以上	0.05	11世紀末	土加膠器、羽釜、瓦筒瓶、瓦	
SK03	橢円形	東西1.4×南北2.0以上	0.2	14世紀後半	土加膠器、羽釜、瓦質土器群、ミニチュア羽釜、折衷器皿、布清底罐、瓦戶 先端窓	
SK07	不整規円形	東西1.5以上×南北3.0以上	0.3	15世紀後半	土加膠器、羽釜、瓦質土器群、瓦体、布清底罐、白磁器、青磁器、瓦質(淡 波式質)	
SK08	不整規円形	東西0.9×南北2.0以上	0.4	15世紀後半以降?	土加膠器、羽釜、瓦質土器群、五輪塔台座部	
SK09	方形?	東西0.9以上×南北1.1以上	0.6	17世紀中期	土加膠器、瓦質土器群、瓦筒瓶、肥前窓(肥前窓瓶、肥、信楽窑信鑑、萬戸美濃窓瓶)、 国産器皿(肥前窓瓶)、青花瓶、白磁瓶、针丸瓦、雙斗瓦、磁石	
SK10	長方形	東西2.1×南北1.0	0.3	17世紀後半	土加膠器、瓦質土器群、瓦筒瓶、(肥前窓瓶、青、信楽窑信鑑、肥、常滑窓瓶、 歌麿窓(歌麿窓))、国産器皿(肥前窓瓶)、青花瓶、白磁瓶	
SK11	方形?	南北2.3以上×南北1.7以上	0.8	19世紀前半	土加膠器、泡物、瓦質土器群、深鉢、蓋、国産窓器(信安窓信鑑、青、京 信樂窑信鑑、青、葉、青、哥窓信鑑)、国産器皿(肥前窓瓶、青)、针丸瓦、 双斗瓦、瓦筒瓶、瓦	
SK12・13	不整形	東西8.0以上×南北5.0以上	0.9	19世紀中期	土加膠器、泡物、ミニチュア羽釜-浅鉢、瓦質土器群、国産器皿(肥前窓瓶、 青、信楽窑信鑑、青、葉、青、哥窓信鑑、青)、国産器皿(肥前窓瓶、青、青、 哥窓信鑑)、国産器皿(肥前窓瓶、青、青、哥窓信鑑、青)、伏見人形、 针丸瓦、瓦筒瓶、瓦、瓦筒瓶、双斗瓦、针丸瓦、青、叶、青、歌麿	大量的瓦を発見する
SK14	長方形	東西0.8×南北4.6以上	0.6	江戸時代?	土加膠器、羽釜、瓦質土器群	
SK15	長方形?	東西1.5×南北1.2以上	0.4	17世紀中期以降?	瓦質土器群、出龍野舟(京信樂窑信鑑)、国産器皿(肥前窓瓶)、御器、灰骨	石組土塁か?



第497次調査 発掘区全景(東から)

今回の発掘調査では、11世紀末頃から遺構・遺物量が増加することや、遺構は検出できなかったが、奈良時代以前の遺物包含層が確認できるなど、從来の林小路町内の調査成果と同様な傾向がうかがえよう。一方、從来の発掘調査と比べると、遺構密度・遺物量とともに少なめである。発掘区が敷地の奥側であることが、1つの要因と考えられるが、明確な理由は不明である。(中島和彦)